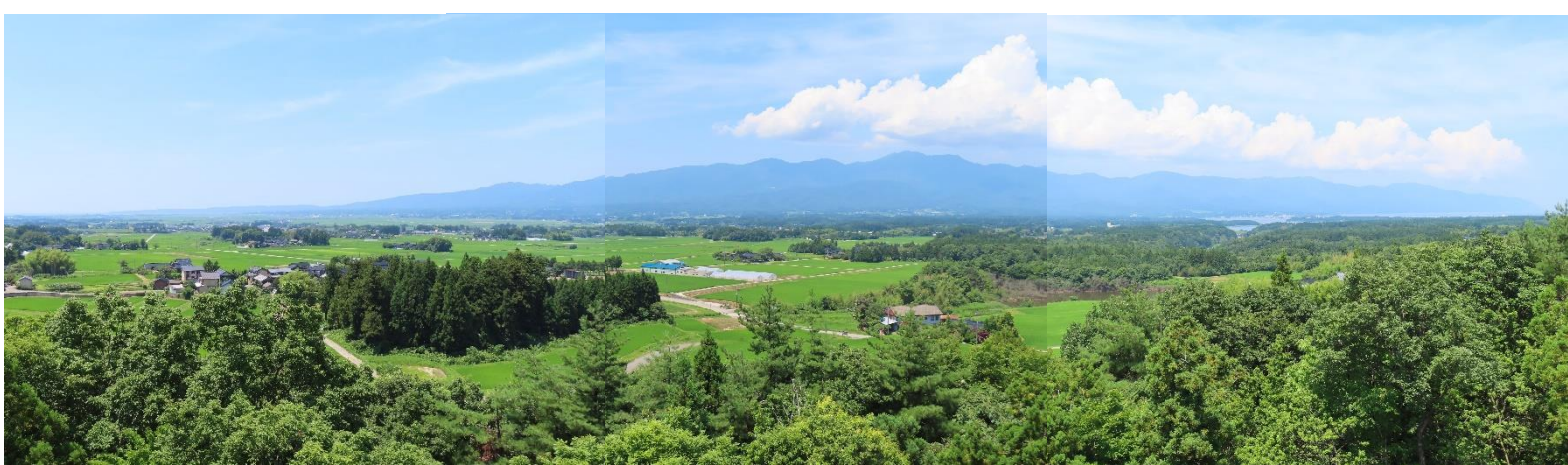


2314 離島覚書（新潟県・佐渡島）



「トキのテラス」より大佐渡山脈を望む、手前が国仲平野

令和5年7月18日

両津港

久しぶりに新潟駅に降り立った。駅前は工事中で、昔の雰囲気はない。タクシーで佐渡汽船のターミナルに向かう。14時30分発の佐渡汽船のジェットfoilに乗る。佐渡島は新潟港の沖合約40kmに位置するが、約1時間で両津港に到着した。所要時間はフェリーの約半分と速い。客席は7割ほどが埋まっていた。

佐渡は「エ」という字を少し傾けたような形の島で、北側に大佐渡山脈、南側に小佐渡山脈が連なり、両山脈は北東と南西を向く。2つの山脈の間は広大な平野で、国仲平野と呼ばれている。

そしてこの国仲平野の東側に両津の市街地と両津港があり、新潟からの船は両津港に着く。

両津の市街地は加茂湖を形成した砂洲上に形成されている。両津の地名はもともと湊と夷^{えびす}という2つの集落の港（津）があったことから付けられたと後述する郷土史家の渡辺和弘さんから聞いた。湊は漁業が中心、夷は半農半漁で商業が盛んだったといわれている。蛇足だが、この2つの集落は古くから漁場争いが絶えず、1864（元治元）年に「沖鯨規定」というマダラとスケトウダラの延縄漁に関する取り決めができて、この規定は戦後漁業法の改定まで続いたと両津博物館の展示物に書かれていた。

本土と佐渡を結ぶアクセスはこの新潟～両津の他に、直江津～小木のルートがある。ただし、前者は日に5便のフェリーと5便のジェットfoilが就航しているのに対し、後者はフェリーが日に2便だけなので、輸送力は前者が圧倒的に多い。つまり佐渡島の玄関口は両津といえる。ちなみに新潟～佐渡間の所要時間はフェリーで2時間30分、ジェットfoilで1時間07分である。また直江津～小木間のフェリーは2時間40分を要す。

なお加茂湖のほとりに佐渡空港が整備されているが、滑走路長は890mしかない。このためジェット機が発着できず、定期便は就航していない。したがって海路が唯一、佐渡島へのアクセス手段となっている。ただし司馬遼太郎が「街道をゆく」の取材で佐渡を訪れた1976（昭和51）年当時は佐渡空港を利用しているので、当時は利用客が多かったと思われる。しかしジェットfoilが就航するようになるとプロペラ機を利用するメリットはなく

なったのだろう。

両津港は重要港湾である。歴史は古く 1869（明治元）年に新潟港の補助港として開港している。1858（安政5）年、わが国は欧米列強から開国を迫られ、安政5カ国条約によって箱館、横浜、新潟、神戸、長崎の5港が条約港に決まった。ただし新潟港は冬季の北西風が厳しいため、イギリス公使ハリー・パークスは佐渡の両津を補助港するよう強く求めた。両津港は北西側にそびえる大佐渡山脈（標高 1000m前後）が冬季の北西風を遮り、冬季でも波静かな港だったからである。かくして両津港は早くから国際港として門戸を開いてきた。これによって佐渡の玄関口は小木から両津に移った。

両津の集落を形成する砂洲は度重なる埋め立てによって拡張されてきた。現在は砂洲上に4本の道路が並行して走り、加茂湖との間を開削した水路には、両津大橋と両津橋（国道350号）、加茂湖橋の3本の橋が架かっている。

両津港と南の玄関口的小木港は国道350号で結ばれている。国道350号は新潟市から海路を隔てて両津港に至り、小木港から再び海路を経て上越市へつながる。

両津の集落は道路の両側に2階建ての古い家が連なる。北側は商店街になっているが、シャッターの閉まっている店が多い。



両津港の棧橋とフェリー（左）、両津の古い人家（右）

佐渡市役所

佐渡汽船ターミナルの1階にあるトヨタレンタリースで車を借り、すぐに国仲平野のほぼ中央に位置する佐渡市役所に向かう。

佐渡島の面積は 855.61 km²、周囲は 280.9 kmで、北方領土を除くと日本一大きな島だ。北側に大佐渡山脈が北東～南西方向に伸び、最高峰は金北山の 1,172mである。これと並行に小佐渡山脈が伸び、両山脈の間に国仲平野が広がることはすでに述べた。もともとこの2つの島の間は海だったが、約2千年前（弥生時代）に隆起して、国仲平野と加茂湖が形成された。ちなみに2つの島は約300万年前に海底が隆起して2列に並び、大きな2つの島へと発達したものである。約10万年前には2つの島の間には砂洲ができて陸続きになった。

佐渡島は両津市、相川町、佐和田町、金井町、新穂村、畑野町、真野町、小木町、羽茂町、赤泊村の1市7町2村が2004（平成16）年に合併して佐渡市が誕生、1島1市になった。

市役所は国仲平野中央の旧金井町に置かれることになり、同町の庁舎を活用してスタートした。しかし両津、相川、羽茂の3ヶ所に支所が置かれ、新穂、畑野、真野、佐和田、赤泊、小木に行政サービスセンターが置かれているなど役所機能が分散して不便だったことから現

在新庁舎の工事が進められており、2023年11月から運用が開始される予定である。

市役所2階の秘書広報課で市勢要覧と簡単な統計書を入手する。続いて建設課で管内図を購入、観光振興課で観光パンフレット等を収集した。

佐渡島の2020（令和2）年国勢調査時の人口は51,492人、世帯数は21,261戸であった。人口のピークは1950（昭和25）年の125,597人であり、以後減少の一途を辿ってきた。2020年の人口はピーク時の4割ほどにすぎず、高齢化率は40.3%に達している。

市役所の近くに中央図書館があり（佐渡総合病院の脇）、試験的に19時まで開館しているということだったので、図書館を訪ね、郷土誌関連の書籍を閲覧する。佐渡島に関する図書はかなりあり、短時間でみるのは難しい。宿に到着予定時間を告げていたため18時に図書館を出て旧新穂村を經由し、加茂湖湖畔の「ホテルニュー桂」に向かう。



佐渡市役所の現庁舎（左）、隣接地に建設中の新庁舎（右）

酒蔵

ホテルニュー桂は加茂湖を見下ろす高台にあり、本館と別館で構成される。

佐渡では1970（昭和45）年以降、温泉のボーリングが進み、各地に20ヶ所ほど温泉が湧出するが、このホテルにも温泉があり、加茂湖温泉と呼ばれている。火山島ではない佐渡島には熱源となるものが少ないことから、佐渡の新第3紀の下戸層や鶴子層に含まれる化石海水が起源とされている。

夕食前に温泉に入浴。泉質は塩化ナトリウム泉の弱アルカリ性であったから、肌がつるつるした。入浴後、大広間の部屋別に指定された席で夕食を食べる。当日のメニューは次の通り、赤泊に水揚げされたズワイガニが出た。ありがたいことに手伝いの女性がカニの身を剥いてくれた。

ベニズワイガニ、刺身（ブリ、甘海老、マダイ）、タラフライ、豚肉野菜鍋、茶碗蒸し、フグの切り身と野菜煮、タコ加工品、長芋、飯①、ナガメの味噌汁。

テーブルには佐渡の地酒5種類が並んでいた。佐渡には以下に示す5つの酒蔵がある。もともとコメは貴重品だったから、日本酒を作る島は少ない。現在日本酒の蔵元がある島は道後島と対馬島にそれぞれ1つあるだけだ。さすがに佐渡は米処だけあって例外的存在で、蔵元は豊富である。

利き酒はできないので、5種類の味比べはできなかったが、生ビールを1杯のみ、辛口と勧められた「北雪」（300ml）を飲む。後日、佐渡島を走り回った折に、これらの酒蔵を訪ね

たが、何れも小さな酒蔵であった。

加藤酒造（旧金井町）：ブランド名は金鶴、拓（ひらく）

北雪酒造（旧赤泊村）：ブランド名は北雪

逸見酒造（旧真野町）：ブランド名は真稜

尾畑酒造（旧真野町）：ブランド名は勇水、鬼ごろし、真野鶴

天領盃酒造（旧両津市）：ブランド名は天領盃



旧赤泊村の北雪酒造（左）、旧真野町の尾畑酒造（右）

令和5年7月19日

加茂湖とカキ養殖

ホテルニュー桂は加茂湖湖畔の高台に建つ。朝風呂を浴びてから、同ホテルの屋上に上がり、加茂湖の写真を撮る。湖面にはたくさんのカキ筏が浮かんでいた。

加茂湖の面積は 4.85 km² で、日本で 46 番目に大きな湖である。ちなみに新潟県内では最も大きい。周囲は 16.95 km に及ぶ。陸から運ばれてきた土砂が砂洲を形成してせき止めた、いわゆる海跡湖である。

湖に流入する河川は大きいものが 6 つあり、1903（明治 36）年に発生した大水害を契機に砂洲の一部を開削して外海とつなげ、水の逃げ道をつくった。水道の幅は約 30m、深さは 4 m である。開削によって海水が流入するようになり、湖は汽水になった。

加茂湖の最も深い場所の水深は 10m 弱で、湖の中央付近が最も深い。湖水の交換は狭い水路に限られることから、富栄養化の進行に伴う水質悪化を防止するため 1968（昭和 43）年からヒューム管で湖内に直接海水を導入しているようだ。また底質環境を改善するために水産庁の補助事業で湖の奥の部分の浚渫工事が 1993（平成 5）年度から 12 年間に渡って行われている。ちなみに浚渫面積は 33ha、浚渫量は 20 万 m³ であった。

汽水湖になってからカキ養殖が始まった。もともと佐渡には天然のマガキが分布していたことから、当初は地蒔養殖が中心であった。1923（大正 12）年の関東大震災を契機にカキの垂下養殖法が考案され、宮城新昌によって実用化が進んだが、加茂湖では 1932（昭和 7）年から垂下式養殖の試験が始まった。この垂下方式は当初の杭打式（簡易垂下養殖法）から樽筏式へと発展し、加茂湖はカキの一大産地となった。

加茂湖のカキ養殖のピークは昭和 50 年代で、カキ養殖業者は約 180 人を数え、筏数は約 2,000 台、生産額は 3.1 億円に成長した。

しかし長年のカキ養殖に加えて湖周辺の農地開発、市街地への人口集中やホテルなどの観光施設の立地によって湖水の水質が悪化、また湖底に堆積した底泥に起因する貧酸素水塊や硫化水素の発生によってカキの養殖環境は悪化する。そのため上述したような外海水の導入や湖底の浚渫などが行われてきたのだがその効果は限定的で、2010（平成 22）年には赤潮によるカキの大量斃死が発生し、同年のカキ養殖生産量は 38 トンにまで落ち込んだ。

現在の加茂湖におけるカキ生産者は 40 人、筏数は 400 台を下回るレベルに低下し、昨年度のカキのむき身生産量は 67 トン、生産額は 1 億円を下回っている。つまりピーク時から 1/4 ほどに縮小しているわけだ。

後述するように真野湾でもカキ養殖が行われているが、真野湾では種苗の導入から出荷まで 3～4 年かかっているのに対し、加茂湖では 1 年で出荷可能であり、それだけ餌のプランクトンが多い。つまり生産力の高い海域なので、加茂湖のカキ養殖は比較優位の立場にある。なお加茂湖のカキ種苗は業者の個別取引に依拠しており、主として宮城県と三重県の種ガキ生産者から購入しているようだ。

加茂湖のカキは基本的にむき身で出荷される。このため、湖畔にはカキむきの作業場が業者ごとに整備されている。なお、一部殻付カキも出荷されている。

加茂湖ではカキ養殖の他にアサリとナマコも漁獲されているが、近年は減少傾向が著しい。



加茂湖と海をつなぐ水路（左）、加茂湖のカキ養殖筏（右）

北一輝

北一輝（1883～1937 年）は佐渡島が産んだ偉大な思想家である。生涯に「国体論及び純正社会主義」「支那革命外史」「日本改造法案大綱」の 3 つの著作を表している。これらを直接読んだことはないが、北の評伝は学生時代に何冊か読んでいて、憧れの存在だった。佐渡に来た時にはその墓を是非訪ねてみたいと思っていた。

北一輝の墓はホテルニュー桂の近くにあった。8 時 10 分ごろ、ホテルを出発し、田んぼの中の道を抜け、少し小高い場所に置かれている北家の菩提寺である勝広寺の墓地に着いた。勝広寺自体は両津の市街地にあるが、墓地がいっぱいになり、郊外に拡大したのである。

北の遺骨はいくつかに分骨され、生まれ故郷の佐渡に戻った遺骨は北家の菩提寺の勝広寺に埋葬された。なお遺骨の一部は東京の目白不動にある大川周明夫妻の墓のそばにも収骨されている。

北家先祖代々の墓地と刻まれた墓石の脇に「北先生彰徳碑建設会」によって石碑が建てら

れており、そこには次の碑文が書かれていた。

「二・二六事件に連座し銃殺刑に処せられたる北一輝先生遺骨はこの先祖代々の墓に納められている。昭和二〇年勅令 579 号、同年二十一年勅令 52 号により大赦が発令され、昭和四十八年八月十九日その墓前報告を期し本碑を建立した」

北一輝の遺骨が佐渡に戻った時、2人の憲兵が同行しており、佐渡では北はいわばタブー視されていたので、北家の墓に埋葬され、北一輝自身の墓は建てられなかった。

続いて両津の市街地の八幡若宮神社境内に置かれている北一輝・吟吉兄弟の顕彰碑を訪ねる。石碑に兄弟のレリーフが埋め込まれている。

北吟吉（1885～1961）は北一輝の弟にあたり、2.26 事件後の第 19 回衆議院議員選挙で当選し、戦後も 4 期務めた政治家である。また多摩美術大学の創立者として知られる。

北一輝に関しては、北の思想に影響を受けた安岡正篤やすおかまさひろが次のような碑文を記している。

「北一輝先生は明治の当地が産んだ偉大な鬼才である。由来佐渡は国家と信仰との為に戦った幾多の革命的人物流謫の地であるが特に順徳上皇と日蓮上人の英魂が先生の心靈に深甚な化を及ぼした感が深い。先生に於て順逆二門無く大道一源に通じた。其の一源は、天皇と法華経であり大地震裂し無量の菩薩摩訶薩湧出する革命を期して殺身供養したと称することが出来る」（原文はカタカナ）

一方、北吟吉に関しては、三菱電機社長や海外経済協力基金の総裁を務めた高杉晋一が記している。

顕彰碑の近くに石塔が置かれていた。中国の要人から北一輝に贈られたものだ。後述する渡辺さんによると、北亡き後、北の従妹と結婚した俳優の丹波哲郎宅に保管されていたが、丹波の死後、この神社の境内に移されたとのことだ。

北が若かりし頃、佐渡新聞にしばしば投稿しているが、この佐渡新聞の創刊者は森知幾ちきという水産伝習所の第 1 期生であることを今回の佐渡への旅で知った。この森という人物について調査すべく、佐渡島をもう一度調査しようと思う。



北家先祖代々の墓（左）、北一輝・吟吉兄弟のレリーフ（右）

続いて両津の商店街にある丸屋書店と石川書店の 2 つの書店を訪ね、佐渡に関する図書を閲覧、本を 4 冊購入した。佐渡島には蔦屋という全国チェーンの本屋があるが、ここには佐渡島に関する図書はほとんど置いてない。古くからの小さな書店が頑張って郷土資料を販売しているのは頼もしい。文具なども販売し、売り上げの維持に努めているのだが、何とか生き残ってほしいものである。その後、佐渡地域振興局水産庁舎に向かう。

佐渡の漁業

9時すぎに新潟県佐渡地域振興局農林水産振興部の水産庁舎を訪ねる。大きな島には県（都）の地域振興局が置かれているが、たいがいは各部局が1ヶ所にまとまっているのが普通である。ところが佐渡島の場合はそれぞれのセクションが分散しており、しかも同じ農林水産振興部でも農業と漁業が別々に離れている。

水産庁舎は両津港に単独で置かれており、すぐ近くに魚市場があった。水産事務所では、唐木沢秀之副参事と海老名秀副部長が対応してくれた。

佐渡島の漁協は表1に示す通りである。広域合併した佐渡漁協と合併に加入しなかった水津、羽吉浜、内浦、内海府、加茂湖、姫津の7漁協である。佐渡にはもともと漁業地区ごとに漁協が組織されていたが、2006（平成18）年4月に島内の19の単協が合併して佐渡漁協になった（第1次合併）。さらに2011（平成23）度には2漁協が加わっている（第2次合併）。なお佐渡漁協には本所の他に両津支所、赤泊支所、小木支所、真野支所、稲鯨支所、高干支所の6支所と出張所がある。

表1 佐渡島の漁協の現状 令和4年6月1日現在

漁協名	組合員			職員数	漁船数		生産額 百万円	主な漁業種類
	正	うち女	准		総数	うち15トン以上		
佐渡	458	5	1,722	33	1,464	11	1,111	定置網、刺網、エビ籠、カニ籠、延縄、イカ釣、板曳網、カキ養殖、一本釣、魚類養殖、ワカメ養殖、ナマコ桁網、採貝藻
水津	43	0	413	3	131	0	170	刺網、魚類養殖、ワカメ養殖、採貝藻
羽吉浜	25	1	99	2	31	0	28	刺網、小型定置網、イカ釣、採貝藻
内浦	38	0	239	4	95	5	632	定置網、刺網、養殖、採貝藻
内海府	34	0	95	4	108	3	311	定置網、刺網、ワカメ養殖、採貝藻
加茂湖	40	0	33	2	102	0	99	カキ養殖
姫津	25	1	44	4	43	4	238	刺網、イカ釣、エビ籠、板曳網、一本釣
合計	663	7	2,645	52	1,974	23	2,589	

佐渡島で営まれている漁業種類別の生産額の推移を表2に示した。2021年の生産額は20億円である。2019年までは30億円を超えていたが、2020年から大きく減少している。この原因はスルメイカとブリの大不漁にある。

生産量が最も多いのが定置網で、これに刺網、かご、採介藻、イカ釣、一本釣の各漁業が続く。

定置網は、2018年漁業センサス時には大型定置網が7経営体（実数は後述するように10ヶ統と思われる）、小型定置網が13経営体であった。大型定置網は両津湾を中心とする島の東部に多い。

刺網は130経営体が営む、カレイ類、メバル類、アンコウ、アカムツ、ズワイガニなど様々な魚種が獲れる。

かご漁業の対象はベニズワイガニとホッコクアカエビ、エッチュウバイなどで、漁場は深いところになる。ホッコクアカエビのかご漁業は両津4、赤泊3、姫津1の合計8経営体が営む。ベニズワイガニは後述する赤泊の弥吉丸だけである。

採介藻は現地で「いそねぎ」と呼ばれ、箱眼鏡を使って海底を覗き、鉤で採る方法である。

漁獲対象はアワビ、サザエ、ナマコ、ウニとエゴノリ、アラメ、モズク、などであり、多岐にわたる。対馬暖流の影響下にある西日本各地のように佐渡島では今のところ「磯焼け」は目立っておらず、採介藻漁業への影響は軽微である。この漁業を営む経営体は356と最も多く、船外機や後述する「たらい船」で操業する。

イカ釣は主としてスルメイカを対象とする。近年のスルメイカ資源の減少で、経営は大きな打撃を受けており、経営体数は8に減少している。

釣りは81経営体が営み、6～7月はマグロの漁期になる。佐渡島のマグロの漁獲枠は大型サイズ（30 kg以上）で109トン、中型サイズ（30 kg未満）で84トンである。

養殖はカキ養殖とワカメ養殖が一部で営まれている。カキ養殖については加茂湖と真野湾の両方で営まれていることはすでに述べた。またニッスイ系の弓ヶ浜水産が和木漁港の沖でギンザケとサクラマスの魚類養殖を始めており、年間の生産量は600～700トンと言われている。

表2 佐渡島の漁業種類別の生産額の推移 単位：百万円

漁業種類	2017	2018	2019	2020	2021
大型定置	1,211	1,260	1,479	707	517
小型定置	94	71	69	58	51
刺網	622	572	538	473	483
かご	389	419	401	347	365
採介藻	308	346	314	259	250
いか釣	277	266	199	230	169
釣り	110	102	92	76	104
板曳網	39	33	29	26	26
延縄	26	9	9	10	8
たこ箱	16	21	17	14	18
その他	77	167	81	159	65
合計	3,168	3,265	3,228	2,359	2,056

佐渡地域振興局農林水産振興部資料



佐渡の代表的な漁業である大型定置網の撤収作業（左）、イカ釣漁船（右）

振興局は毎年、「佐渡の水産概要」という小冊子をつくっている。これによると令和2年の新潟県全体の漁獲量は13,719トンであった。このうち佐渡島の漁獲量は5,401トンで県

下全体に占める佐渡島の割合は 39.4%に相当する。また新潟県の養殖生産量の 1,163 トンのすべては佐渡島で生産したものである。さらに漁業経営体の 5 割以上を佐渡が占めているので、新潟県の漁業の約半分は佐渡島が担っているわけだ。

佐渡で漁獲された水産物は、佐渡魚市場と本土側の新潟魚市場に出荷される。出荷先は各漁業者の判断で決められるが、佐渡魚市場への出荷割合は 7 割程度である。佐渡魚市場の現況については後述する。

佐渡の農業

旧金井町にある新潟県佐渡地域振興局農林水産部の農政庁舎に向かう。佐渡農業普及指導センターがまとめている「令和 4 年度普及活動年報」をいただき、佐渡の農業の概要を聞く。

佐渡島の耕地面積は 9,830ha で、島の面積の 1 割強を占める。農業の中心は国仲平野であるが、山岳地帯が島の多くを占めているにもかかわらず耕地面積が広いのは、中山間地を積極的に棚田として活用してきた歴史に求められるだろう。

令和 2 年の農業センサス時の総農家数は 4,647 戸で、うち販売農家数は 3,301 戸であった。同年の農業産出額は 97.2 億円である。佐渡市の農業産出額のピークは 1992（平成 4）年の 226.9 億円であったから、ピーク時からは半分以下に減少している。ただここ 10 年ほどはほぼ横ばいで推移している。ちなみに上述したとおり漁業総生産額は 20 億円ほどなので、今では農業生産額が漁業生産額を大きく上回っている。

農業産出額で最も多いのは米で、66.2 億円と圧倒的に多い。主産地は国仲平野であるが、佐渡の場合は棚田が多く、耕作可能な土地はことごとく活用してきた。なお近年は飼料米を作る生産者も増えている。

米に続くのが果実の 17.8 億円である。この大部分が「おけさ柿」を中心とするカキだ。主として小佐渡地域が産地となっている。カキ以外ではブドウ、西洋梨、スモモ、ミカンなどが続く。なお佐渡はミカンとリンゴが栽培されるなど、多様な果樹が少量ながら生産されているところに特徴がある。

野菜類は 4.2 億円であり、基本的に栽培可能なものは何でも作られているが、多いのがイチゴとアスパラガスだ。



ロール状に巻かれた飼料米（左）、収穫期を終えたアスパラガス（右）

畜産業の産出額は 5.2 億円で、生乳生産が最も多く、肉用牛の子牛生産、肉用牛の肥育と続く。生産した子牛は高千^{たかち}にある家畜市場でセリにかけられる。セリ市は年 3 回であり、令

和4年の出荷数は373頭であった。島内で肥育した肉用牛の出荷額は2,500万円ほどとわずかであり、主として島内のAコープで販売されている。生乳生産の現状については後述する。

佐渡の観光動向

県の農政庁舎から、前日に引き続き、佐渡市役所の観光振興課を訪ねた。新型コロナ流行後に佐渡島を訪れた観光入込客数が知りたかったからだ。

佐渡の観光客数のピークは1991（平成3）年の120万人であった。バブル崩壊に伴って減少傾向が顕著となり、2010（平成22）年には54.7万人と、ピーク時の約1/2となっている。その後も減り続け、新型コロナの流行前は50万人ほどで推移していた。しかし新型コロナの流行に伴い、2020（令和2）年には26.1万人とさらに半減、どん底に陥っていた。令和3年はほぼ同水準の27.2万人で、昨年（令和4年）は36.6万人となり、若干回復しているが、いまだコロナ前の水準には至っていない。

観光客の減少は宿泊施設への大きな打撃となっており、前泊したホテルニュー桂の隣にある大きなホテルは倒産したようで、放置されたままであった。また加茂湖の北西岸の高台にある「秋津温泉・やまきホテル」は経営者が中国系だったようで、宿泊客は激減、現在は閉鎖されたままになっている。

佐渡島は2013（平成25）年に日本ジオパークネットワークへの加盟が認められ、今後、世界ジオパークへの加盟をめざしている。また「佐渡島の金山」の世界遺産登録にも力を入れており、佐渡の自然と歴史、文化を観光の柱として観光振興を図ろうと懸命である。石垣島は新空港の建設によって観光客は飛躍的に増えたから、ジェット機の就航ができるように佐渡空港の拡張も考えられているようだ。



ホテルニュー桂の隣の倒産したホテル（左）、コロナ渦で閉鎖に追い込まれた秋津温泉やまきホテル（右）

佐渡の歴史

佐渡島の歴史に関する私の知識といえば、佐渡の金山と幕府の天領だったという程度のものであった。佐渡に来て3日目の朝、関集落のどぶろく屋で「どこから来た？」と聞かれたので「神奈川県厚木」と答えると、神奈川県に通っていたというUターンの男性が「佐渡は神奈川県厚木から来た本間家が統治した時代がある」と話された。本間家が相模の国から来たという話は初耳だったので、佐渡の歴史に改めて興味が沸き、博物館や図書館でにわか勉強したわけだが、その成果の概略を記しておこう。

佐渡の歴史は、大まかに①縄文・弥生・古墳の先史時代、②鎌倉から戦国時代にかけての守護地頭時代、③佐渡金山が開発されてからの奉行時代、④明治以降の近代に区分される。

佐渡島が文献に登場するのは8世紀のことで、759（天平宝字3）年に国司が置かれている。そして764（天平宝字8）年ごろに国分寺が建立された。その後の約380年間は佐渡の歴史に関する資料が少なく空白になっているようだ。

1192（建久3）年、源頼朝は鎌倉幕府を開く。頼朝の死後、頼家、実朝が将軍となったが、北条時政が幕府の実権を握る。実朝が暗殺され、苦境に立たされた鎌倉幕府の転覆を図った後鳥羽上皇や順徳上皇は1221（承久3）年に承久の乱を起こす。しかし幕府軍に敗れ、父親の後鳥羽上皇は隠岐へ、順徳上皇は佐渡に流された。鎌倉幕府は1185（文治元）年に守護地頭制度を設け、佐渡は北条氏の一門の北条宣時が1271（文永8）年に守護に任命される。直接には相模国出身の本間氏を守護代として佐渡を統治させた。そして順徳上皇の警護と監視にあたった。地頭は一族の波多本間氏、雑太本間氏、羽茂本間氏と、藍原氏（吉井地区）、渋谷氏（加茂地区）、土屋氏（新徳地区）であった。

1333（元弘3）年に鎌倉幕府が滅亡すると、本間氏は窮地に陥った。その後、羽茂本郷高茂が佐渡の実権を握る。しかし羽茂本郷氏と久知本郷氏の対立が激しくなり、佐渡も戦国時代に突入した。上杉謙信が佐渡の抗争の調停に乗り出し、佐渡を支配下に置いたが間もなく亡くなる。信玄の後を継いだ上杉景勝は1589（天正17）年に軍を率いて佐渡に上陸し、反上杉にまわった羽茂本郷高茂を破り、佐渡を平定、統治する。そして景勝は河村彦左衛門、黒金尚信を代官として送り込んだ。

豊臣秀吉が天下を統一すると佐渡は豊臣領となり、秀吉は佐渡の金銀山を上杉景勝に預け、景勝は金山奉行、代官を配置し、佐渡を統治する。景勝は会津に国替えになったが佐渡の支配はそのまま続いた。

1600（慶長5）年、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、翌年、佐渡を天領とする。この年に相川金銀山が発見され、佐渡はゴールドラッシュに沸き、急速に発展した。

内海府（両津～鷺崎）

佐渡の海岸線を一周する道路が整備されている。県道45号線で、「佐渡一周線」と呼ばれている。ただし佐和田から小木の間は国道360号になり、羽茂小泊から小木半島先端の沢崎鼻までは市道になる。つまり完全な一周道路ではない。なおこの県道45号の総延長は167.2kmに及び、日本一長い主要地方道のようなのだ。

佐渡市役所で用事を済ませ、両津の市街地から県道45号を一路北上する。両津港北の佐渡島東岸は内海府と呼ばれ、岬先端の弾崎^{はじきざき}まで山にへばりつくように狭隘な道路が続く。市役所内を回るうちに降り始めた雨はますます強くなってきた。

両津市街地を過ぎると羽吉集落の手前に東北電力の両津火力発電所があった。羽吉の集落のはずれに羽吉漁港（第1種）が整備されている。妻木を過ぎた次の集落が白瀬で、白瀬漁港（第1種）が置かれている。

玉崎に続く和木^{わき}集落の手前に和木漁港（第1種）がある。ここは佐渡で唯一ギンザケ養殖が行われている場所だ。漁港の沖300～400m付近に養殖漁場がある。和木で事業をしているのはニッスイ系の弓ヶ浜水産㈱（鳥取県の境港沖でギンザケ養殖を行っている）で、2015

年7月からこの地に進出した。ギンザケの他に2018年からサクラマスも養殖している（全体の1割程度がサクラマス）。11～12月に種苗を入れ、6月ごろから出荷する。水揚げの期間は2ヶ月ほどのことで、すでにすべて出荷を終えていたので、漁港には誰もいなかった。出荷時期は極めて忙しくなるため、島外から応援が来るが、彼らは民宿や旅館に泊まって仕事をしている。養殖施設は円形水槽で餌料は配合飼料のEPを自動給餌機で与えている。

なお佐渡島におけるギンザケ養殖は1983（昭和58）年から行われ、10年間で10億円産業にまで成長した。しかし、当時の養殖ギンザケは品質が劣っており、チリ銀（チリ産の養殖ギンザケ）に押されて中断に追い込まれていたから、久しぶりに佐渡島でギンザケ養殖が復活したことになる。

馬首の集落を過ぎると、浦川の集落に至る。この集落には浦川漁港（第1種）が整備されている。隣の歌見の集落にかけての背後には比較的まとまった棚田があった。250mほどの海中橋（黒姫橋）を渡ると、黒姫漁港（第1種）があり、大型定置網の根拠地となっていた。風雨は益々強くなり、海は荒れ、海水は茶褐色を呈してきた。黒姫からは山が海に迫る。トンネルを2つ抜けると北小浦に着いた。もとの45号線は海岸沿いの崖下を通っていたと思われるが、危険なためトンネルを作った。北小浦漁港（第1種）があり、旧小学校の校舎には北小浦ダイビングセンターと書かれていたから、校舎をダイビング客用に活用しているのだろう。

県道から少し下ったところにある見立の集落を過ぎると、内海府で最も大きな集落である鷺崎に着いた。こちらには鷺崎漁港（第4種）が整備され、内海府の避難港として位置づけられている。集落の高台には棚田が作られていた。鷺崎には今から40年ほど前に集落の講演会に招かれて訪れたことがあるが、当時の記憶はほとんど残っていなかった。

内海府は大佐渡山脈の東側に当たるため、冬季の北西風が遮られ、冬でも海は比較的静穏である。そのため佐渡島の大型定置網はこの地域に集中する。南から羽吉浜、白瀬、和木、平松、黒姫、北小浦、鷺崎とほぼ等間隔で7つの大型定置網が敷設されている。集落は山を背にした狭隘な土地に形成され、屋根は黒色の能登瓦が特徴だ。大佐渡山脈からは多数の小河川が流れ込んでおり、河口付近の谷あいには棚田が開かれている。



和木漁港に係留されている魚類養殖の作業船（左）、鷺崎の漁港と集落（右）

外海府（鷺崎～関）

佐渡島の北端・弾岬を回ると、そとかいふ外海府である。

県道 45 号は今では少し高いところを通っているが、旧道は海岸沿いの細い道だったに違いない。藻浦の先に二ツ亀島という名勝があり、賽の河原をへて願の集落に至る。願の集落は断崖絶壁の下に形成されている。この集落には数軒の民宿があった。旧道を二ツ亀島に戻る中間あたりに賽の河原がある。ここには 40 年ほど前に鷺崎に講演にきた帰りに寄ったことがあったので、再訪しようと思って向かったが、午後から降った大量の雨で沢から勢いよく水が流れ込んで道をふさいでいたため、断念せざるを得なかった。賽の河原に向かう海岸には大量のゴミが漂着していた。

県道はもう一つの名勝である大野亀島の前を通り、北鶴島の集落に至る。この間の道は細く、車がすれ違うのも困難だ。海岸を迂回した道路がつけられなかったとみえて、岩をくりぬいただけの小さなトンネルが3つもあった。

北鶴島の集落背後には比較的規模の大きな棚田が連なっている。この集落の棚田の一部で行われてきた「車田植」は国の重要無形民俗文化財に指定されている。旧家に伝承されている古代の田植習俗で、旧家の当主が苗代田から苗3束を迎えて田の神に祀った後、その苗を車田に運び、田面に御神酒を注いで祈りを捧げる。祈りが終わると、3人の早乙女が畔の三方から田の中央へと進み、半束を田の中心に寄せ合わせるように植え、その後には畔で歌われる田植唄に合わせて、車状に後退しながら苗を植えていくものだ。後日聞いた話ではこのイベントの旧家は後継ぎがおらず、この伝統的行事がいつまで継続するものが危ぶまれているという。

鷺崎を過ぎたあたりから雨は止み、風も和らいできたので、海も静かになってきた。北鶴島の次が真更川の集落である。集落の前には小さな真更川漁港（第1種）が整備され、背後には棚田が作られている。その後、県道は断崖の上を通り、やがて海府大橋にでた。この橋は大ザレ川という険しい渓谷に架かっており、橋の下は目もくらむような深い谷となっており、折からの雨で濁流が激しく海に流れ込んでいた。

押出岬で県道は一気に海に下る。ここは「跳坂」と呼ばれるヘアピンカーブで、この坂の途中から岩谷口と五十浦の集落が見える。集落手前の泊川は降水の影響で滝となって海に流れ込んでいた。2つの集落を経て、この日の宿泊地である関の集落に着いた。17時40分に民宿かわぐち荘に入る。

風呂に入ってさっそく夕食を食べる。夕食のメニューはニンニク丸揚げ、枝豆、マッシュポテト、春雨サラダ、ギンダラ焼き、鶏肉・茄子・ピーマン煮、ギンバソウ（アカモクの芽）、サザエ、飯①、みそ汁であった。



断崖の下に形成された願の集落（左）、跳坂から岩谷口と五十浦の集落を望む（右）

令和5年7月20日

関とどぶろく

前日の夕食時と朝食時の2回にわたって「民宿かわぐち荘」のご主人に話を聞いた。ご主人は兎年生まれの72歳。私よりも3つ下になる。この関の集落で生まれて外に出たことがなく、林業と民宿をメインに生計を立ててきた。現在は磯根の漁師と遊漁案内を行っている。

関の集落は関川沿いの谷戸地に形成されている。もとは43戸あったそうだが、現在は22戸に減少、集落の1/3は空き家だ。1934（昭和9）年と1944（昭和19）年に集落の半分が焼ける火事があったという。川口さんの先祖は佐和田から移住してきたらしい。戦後まもなくまでは集落内での通婚が中心だったため、古い方言がそのまま残っており、隣の真更川とも言葉が異なっていたという。

佐渡一周道路の県道45号は、1962（昭和37）年に開通した。車が通れる道路がなかった時代は、大佐渡の山脈を越え、内海府に出てから海岸沿いを両津まで歩いたそうだ。収穫したワカメは干しワカメに加工し、担いで両津まで売りにいった。帰りに子豚2頭を担いで戻ってくる強者もいたという。標高1,000m近い山越えだったので大変だったろう。郵便局は小田こだにあり、郵便配達人は関から真更川まで毎日歩いて配達していたという。道路が開通後、バスが運行されるようになるが、両津から相川を経て関まではバスの乗り換え時間を含めて2時間半かかったから現在と比べると大変なへき地だったのである。

川口家はもともと炭焼きを生業とし、林業で生計を立ててきた。現在、民宿として使用している家の一部は1954（昭和27）年に建っているが、山から木を伐り出して建てたものだ。秋から冬にかけて木を伐採し、木挽職人が木の4面をおとし、山で製材したものを川沿いに下ろしたという。現地で「アテビ」と称する檜あすなろの木が多く自生するので、この木を中心に用途に合わせて樹木を伐採したようだ。

炭焼きの仕事は石炭や石油の普及でなくなったので、川口さんはその後、椎茸栽培をしていた。しかし中国産に押されて経営的に難しくなり、ミズナラを伐採した後に植林をする仕事に変わった。つまり生粋の林業家で、新潟県の第1号の「林業士」になっている。

民宿は昭和45～46年ごろに父親の代に開業した。「離島ブーム」の頃は関の集落だけでも民宿が5～6件あったが、現在は「かわぐち荘」のみになっている。林業と民宿を兼業しながら山に詳しい特技を活かしてトレッキングガイドを3～4年前までやっていた。ガイドをしていたころは山歩きの人や全国の一等三角点を回る趣味の人などがよく泊まったそうだ。佐渡の自然を撮り続けた写真家であり、アクアデザインアマンの創業者である天野尚たのしさん（1954～2015）もこうした宿泊客の1人だった。民宿かわぐち荘を拠点に活動を続けた。天野は「佐渡－海底から原始の森へ」という佐渡をテーマにした写真集を2冊出版している。彼が撮った金剛杉の写真は洞爺湖サミットの折に各国首脳の会食会場に飾られた。

現在の民宿の顧客は瀬渡しを中心とする固定客で、関東方面からの顧客が多い。川口さんは海の方は不慣れなため、時々、瀬渡船を岩場に乗り上げてしまうこともあるらしい。遊漁の対象は、以前はクロダイが多かったが、現在はマダイがメインになっている。若い人はヒラマサ狙いでやってくるという。

関の集落には15町歩ほどの田があった。用水は関川の4km上流から引いた。つまり関の集落ではほぼ全戸が米を自給していた。しかし高齢化の進行とともに米を作る家は減り、現

在は3戸（地元は2戸だけで、5反と2反分。残りの1戸は地域外に田を有する）だけになっている。しかし来年からは全員がやめることになっており、関の集落に米作りをする人はなくなる予定だという。

民宿の食堂の壁に海水魚の魚拓に混ざって尺イワナの魚拓が掲げられていた。関川の下流で釣られたものだという。佐渡島にイワナとヤマメが生息することは、溪流釣り仲間であった清水先生（東海大学海洋学部名誉教授）から聞いていたが、魚拓をみて改めて再認識した。ご主人によると民宿の先の橋の下でも結構釣れるという。中には50 cmを超えるものもあるらしい。溪流釣りの解禁は3月1日から9月末というから、機会を改めて出直したいと思った次第だが、足がだいぶ弱ってきたので実現可能か怪しい。なお、佐渡でも至る所に砂防堰堤ができていて障害物が多いという。溪流魚の他に佐渡島ではアユも遡上する。しかし、近年の水温上昇で遡上するアユが減っているらしい。

関の漁業は、「イソネギ」が中心である。「見突」でワカメ、エゴノリ、モズクなどの海藻類やサザエ、タコ、ナマコなどを採る。現在、関の漁師は川口さんを含めて3人だけである。かつてワカメを採る人は10人ほどいたが、今は2人だけになった。もともと関は海藻の豊富などところだったが、近年は水温の上昇が影響して、少なくなっているらしい。



民宿かわぐち荘のご主人（左）、関の集落（右）

朝食を食べて、8時20分に民宿を出発。集落を回り、県道沿いにあるドブロクの加工場兼直売所を訪ねた。話を聞いた人は浜田さん（70歳）といい、関の出身で5年前にUターンした。先祖は海老名市の浜田から来たという。

このドブロクを作っている会社は佐渡発酵株式会社といい、2011（平成23）年3月に発足している。限界集落化しつつある関の集落を何とか引き立てようと、関集落を中心とする30人ほどが集まって、地域おこしの願いを込めて設立した。昔ながらのドブロクをつくっている。

開業当初の杜氏はやめており、現在は釣りが好きで佐渡にやってきたタカラトミーに勤めていた人が独学で酒造りを勉強し、新しい杜氏になっている。この人は変わり者で夜だけ働いているという。販売している商品はどぶろくと濁酒、「麴おちち」という甘酒の3種類である。濁酒を1本購入した。

外海府（関～北狄）

関の集落から「禿ノ高トンネル」を抜けると矢柄の集落、さらに「大倉トンネル」を抜けると大倉の集落と続き、小田の集落に入った。矢柄、大倉ともに背後に山が迫り、海岸沿い

に集落が形成され、近くで棚田が耕作されている。目の前の外海府の海はべた凧であった。

小田の集落に入ると、道路脇に「梶井五郎左エ門家の由来」と書かれた石碑があり、その先に「海の精」（豊田晴彦作）と題する石の彫刻が置かれていた。梶井家は江戸時代に農林業、酒造業、海運業などを営み、相川金山奉行所のご用達だった家のように、16代当主が建てたものだ。

石名、小野見の集落を抜け、高干（北田野浦）に入る。集落内には高干漁港（第2種）が整備されている。外海府では比較的大きな漁港で、漁港内にはイカ釣り船2隻、オッターボードの付いた底曳網漁船2隻が係留されていた。しかし底曳網の方はすでに廃船になっている様子だった。ここには大型定置網（高干外謀）が営まれており、荷捌場には定置網の漁獲物を処理する選別台が置かれている。事務所の近くに高干漁業集落が「離島漁業再生支援交付金」で購入した保冷库が置かれていた。

この先の海に突き出た岬が入崎で、外海府の代表的な観光地である。海水浴場、キャンプ場、入埼灯台があり、岬の先端に帆掛島が見える。二つの岩にロープが掛かっていた。

高干の集落からは入川^{にゅうがわ}沿いを登り、大佐渡山脈を横断し両津に抜けるドンデン入川線が整備されている。大佐渡山脈の北側には石名と和木を結ぶ林道があるだけなので、この道路は山越えの重要なルートになっている。そして佐渡の最高峰金北山への登山口の入口にも通じている。

本州と同じようにアユ、イワナ、ヤマメが生息する入川はどんな溪相を有するのか興味があつたので5kmほど遡った。いかにもヤマメやイワナが生息しそうな溪相である。途中、横浜ナンバーのワンボックスカーが止まっていたので、おそらく釣りに入っているのだろう。その先に下流の水田に水を引く取水口のある場所があり、川を横断する簡素な木橋が掛かっていた。ちょうど地元の人がおおり、話を聞くと水量の調整に来たとのことであつた。前日、大雨が降り川の水量が増えていたので、様子を見て調整したのだろう。この道路は冬季間閉鎖される。そのゲートのある場所まで行き、引き返した。

再び県道45号（佐渡一周道路）に出た最初の集落が入川である。宮本常一の「私の日本地図7佐渡」にはこの近くの南片^{ほくろ}辺に住む博^{はく}勞^{ろう}を訪ねたことが書かれているが、この高干周辺は昔から牛の放牧が盛んであつたことから牛市がたっていた。その名残で現在も佐渡で唯一の子牛のセリ市がここで行われている。セリ場は道路脇にあり、年3回開催される。取扱量が少ないせいか、セリ場の規模は小さく、建物は木造であつた。令和4年の取引実績は373頭で、メスと去勢牛合わせた平均価格は64.7万円であつた。なお佐渡における子牛の取引実績は平成30年の288頭から年々増加している。

この地区には高干漁港（北立島地区）が整備されているが、船外機が5～6隻置かれた斜路あるだけで、漁業は盛んではない。

北川内、後尾、石花^{いしば}の各集落を経て、北片片の集落に入った。この集落には「民話の館」という建物があり、その敷地内に木下順二（1914～2006）が揮毫した「鶴のふるさと」という石碑が置かれていた。木下の代表的な戯曲「夕鶴」のもとになったのが、この地方に伝わる「鶴女房」という民話だつたことが縁であつた。

この北川内の背後には棚田が広がっている。また以前は南川内の集落とそれぞれ独立していたようだが、現在は一つの集落にまとまっている。

「南片片トンネル」「鹿ノ浦トンネル」そして鹿ノ浦大橋を抜けると平根岬に至る。平根岬は標高 20mほどの海岸段丘の斜面にたくさんの穴があることで知られている。小さな穴ができ、その中に硬い礫が入ると、波浪による渦で周囲の岩を侵蝕、研磨して次第に大きな穴になったもので、波浪の厳しい海岸や流れの早い渓谷などによくみられる。この海岸の穴（甌穴）は 78 個もあり、しかも 2 m以上の大きなものが 14 個もあることから佐渡市の天然記念物に指定されている。この斜面をみおろす場所にレストハウスが建っていたようだが、現在は放棄され、コンクリートの残骸を残すのみとなっている。

坂を下ると戸中、戸地の集落を経て、北狄に至る。北狄の集落は能登瓦の黒い屋根瓦の家が多い。集落の背後は広大な棚田が連なる。ここから姫津にかけての海岸線は尖閣湾と呼ばれ、切り立った崖の深い入江が連なる景勝地である。



入川の J A 佐渡の家畜市場（左）、北川内背後の棚田から石花の集落を望む（右）

姫津

姫津の集落の先祖は山口県の石見^{いわみ}から移住してきた人たちである。佐渡金山奉行所の奉行・大久保長安（1545～1613）の前任地は石見銀山であった。相川の町がゴールドラッシュに沸き、一挙に人口が 5 万人以上に膨れ上がって結果、食べ物が足りなくなる。棚田を開発して米を増産すると同時に、魚介類の供給を増やす必要性に迫られた。長安はかつて知った石見から漁業に長けた漁師を佐渡に移住させ、水産物の供給体制を確立したのである。

石見からの漁業移住者が最初に入植したのが相川南部の春日崎だったらしい。しかしこの地は冬季の北西風がきつく、漁港として欠陥を抱えていたため、沖にずらりと岩が並び、静穏度が確保しやすい現在の姫津に移ったとのことだ。

現在、沖に並ぶ岩礁群はコンクリートで連結され、巨大な防波堤になっている。その内側にさらに防波堤がつくられ、その背後に集落が形成されている。

沖の防波堤と姫津漁港（第 2 種）の間にはアーチ状の姫津大橋（平成 8 年 3 月竣工）が架けられ、沖の岩礁群に渡ることができる。橋のもとには姫津漁協女性部の加工場と直売所が置かれている。基本的に土日と祝祭日の営業なので、この日は閉まっていた。

アーチ橋から沖を眺めると、隣の達者集落の大型定置網が撤収作業を行っていた。この定置網は地元の土建業者が経営していると、後に水津の民宿で聞いた。

姫津の漁港内には 19 トン型のイカ釣り漁船 2 隻（日の出丸と佐光丸）が係留されていた。この他に漁港内には漁船が 6 隻ほど浮かび、船外機 10 隻ほどが斜路に陸揚げされている。

集落を見て歩く。表札や墓石を見ると、石見という姓が多い。県道に出たところで坂下さんという方にお会いした。先方も見知らぬ人が集落を歩いているので興味をもったようで「何をしている」と聞いてきた。実は姫津という土地はかつて北洋に多くの漁船員を送っている土地であることを知っていたので姫津という集落がどういうところが興味を持っていたと話した。すると北洋漁業に大きな貢献をした石見三蔵の顕彰碑に案内してくれ、北洋漁業に詳しい人がいるとってご自宅まで連れて行ってくれた。連れて行かれた先は森井一蔵さん宅であった。ちょうど姫津漁協の事務所の真向かいの家だった。

残念ながら森井さんは不在だった。足の悪い奥さんに代わって相川の町までバスで買い物に出かけていた。まだ昼食を食べていなかったもので、昼食後にご自宅を再び訪ねることにして昼食を食べて時間をつぶすことにした。坂下さんに近くの食堂を教わったが場所がよくわからず、結局相川まで行くはめになった。



沖の岩礁に架けられた姫津大橋（左）、姫津漁港と姫津の集落（右）

森井一蔵さんと最後の蟹工船

相川の街から戻り、森井一蔵さん宅を再び訪れる。森井さんは 1937（昭和 12）年 1 月生まれで 87 歳になるが、体は引き締まり、精悍な表情からとても 87 歳には見えない。蟹工船の川崎船（手漕ぎの和式漁船で、船室はない）や独航船の船頭をしていた方で、宇佐美昇三さんが書かれた「蟹工船興亡史」（凱風社）にも出てくる。

森井さんが最初に北洋の蟹工船に出稼ぎに行ったのは 1957（昭和 32）年のことである。21 歳であった。蟹工船は函館から出航していたから、佐渡島から新潟に出て、日本海側を鉄路で青森に行き、青函連絡船で函館に渡った。以来、1970（昭和 45）年に終焉を迎えるまで蟹工船で働いた。その後も日本水産のカレイ工船、ミール船、船凍すり身船に乗り、1987（昭和 62）年まで 31 年にわたって北洋漁業で活躍したのである。

森井さんが乗った蟹工船は日本水産㈱の東慶丸（後に松久丸）である。蟹工船（母船）は 10 隻の川崎船を船の脇に吊るして漁場に向かう。これに 3 隻の独航船が従った。独航船は刺網を漁労長の指示で設置する役割、川崎船は刺網を引き揚げてカニを外す役割を担った。森井さんは若いころは川崎船で働き、最後は独航船の船頭をしていた（川崎船による刺網の操業は昭和 44 年までで 45 年からかごに変わった）。漁場はブリストル湾である（西カムチャッカで操業する蟹工船もあった）。漁獲対象はタラバガニだった。ズワイガニは深いところに生息するが、タラバガニは浅いところに生息するらしい。

川崎船には9人が乗り込んだ。刺網は1反が35間で、船団全体では1万反の網が設置されたそうだ。川崎船は1隻あたり200反分(約10km)を引き揚げた。漁場は母船から15～20分の近場であった。

漁獲枠に達するまで操業が続けられたが、短い年で約3ヶ月間、長い年では9ヶ月に及んだこともあったという。24ポンド缶2ダース分が1箱で、これを3万箱が漁獲枠という年もあった。

川崎船は早朝網を仕掛けてある漁場に向かい、網からカニを外し、母船に戻る。一日中カニを外す作業をするため、頻りに腕を動かすことになりシャツの袖が3日で穴があいたという。網を外し終わると、川崎船は母船に戻り、母船上に引き揚げられる。刺網にかかったゴミ類を掃除しながら干す作業をして一日の仕事が終わる。休み時間は18時～2時までの8時間であったが、海員組合が強かったので、小林多喜二の小説に出てくるような労働環境ではなかったが、兎に角、睡眠不足で眠くてしょうがなかったそうだ。

朝と夜は母船内で食事を食べたが、昼は「お鉢」と称する飯と沢庵、つくだ煮だけの食事を船の上で食べたそうだ。最初に蟹工船に乗った昭和31年は「外米」だったという。

漁場はベタ風の日もあれば、川崎船が降ろせないほどの時化もあり、厳しい労働環境であった。こうした中で死亡した人もいるそうだ。亡くなった人はシートにくるみ、日の丸で包み、重いアンカーで水深の一番深い海域に葬ったという。

蟹工船は製造部と漁労部に分かれていたが、森井さんはもっぱら漁労部で働いた。蟹工船の乗組員は川崎船だけで90人いたので、全体では200人ほどが従事していた。昭和31年の月給は5,000円で航海手当などがついて月に10万円以上になったそうだ。この時代の姫津集落の男子はほとんどの人が蟹工船に乗っていたので、姫津は相川町で最も納税額に多い地区だったのが自慢であった。

姫津のように蟹工船に乗った漁村は青森県の鱒ヶ沢、秋田県の北浦、北海道の浦川(新潟の馬瀬から移住した集落)、函館、そして富山県であった。出身地毎にチームをつくり、競わせていたという。

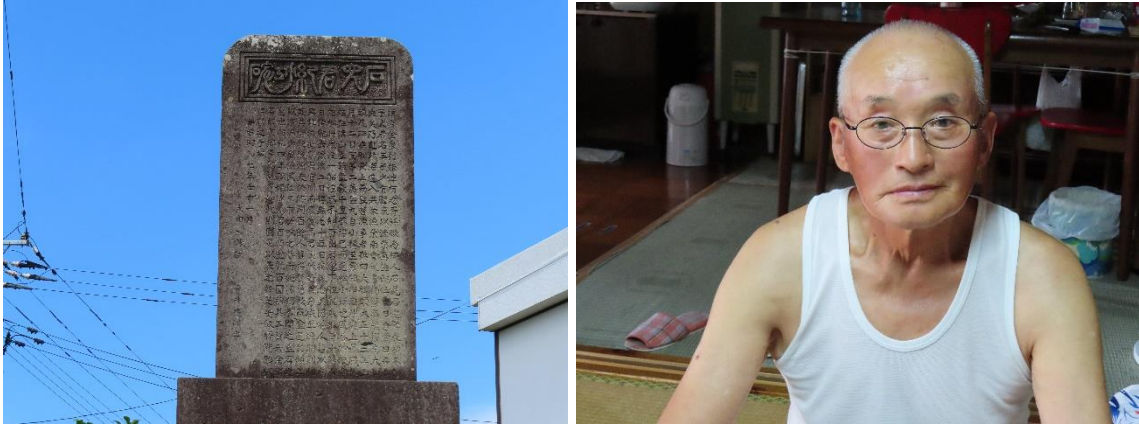
森井さんはカニ漁業が終わるとサケ・マス流し網漁業に従事し、蟹工船が終焉した後も遠洋漁業に従事したことはすでに述べたが、姫津の集落の男子はほとんど全員が森井さんと同じように北洋漁業に出稼ぎに出かけていた。北洋漁業が終焉してからは、マグロ延縄、サンマ棒受網、底曳網などの漁労長には姫津出身の人が多かった。このため集落に男がいなくなったから、留守中、姫津では婦人消防団が組織されていた。

姫津集落のほとんどの男子が北洋で働くようになったのは石見三蔵という人物のおかげである。彼の顕彰碑が県道45号の脇に置かれている。大正時代、姫津出身の石見三蔵という大船頭が故郷の姫津に戻ってきて漁夫を募集し、蟹工船に乗せたのがこの集落の人々が北洋漁業に関わる始まりであった。

姫津の漁師は川崎船に帆を張り、タラを追って北海道に渡った。タラの漁場ではカニが獲れ、漁師はこれをおかずに食べた。タラの漁場にいるこのカニは誰ともなくタラバガニと呼ばれていた。蟹工船は上述したように川崎船で刺網を引き揚げたから、この船の操船に慣れていた姫津の漁師はうってつけだったのである。

石碑の文字はよく読めなかったので、この石碑を解説した宇佐美さんによると、石見は和

嶋貞二とならんで蟹工船の草分けだった菊池鉄弥の危機を救った大船頭であった。1923（大正 12）年に蟹工船「第二萬盛丸」が暴風雪で沈没した時、素早く川崎船を下ろして適切な処置をとり菊池ら 13 人の命を救ったのだった。また森井さんによると、石見は西カムチャックでタラバガニが産卵のために浅瀬入ってくることを突き止め、カニの生態に相当詳しい人だったようである。



石見三蔵の顕彰碑（左）、最後の蟹工船の船頭・森井一蔵さん（右）

北沢浮遊選鉱場跡

姫津の集落の隣が達者の集落で、姫津の街並みとほぼ連続している。小川の集落を過ぎると相川の町に入った。

「きらりうむ佐渡」のなかにある相川観光案内所で相川に関するパンフレット類を入手し、引き続いて北沢浮遊選鉱場跡を訪ねた。ここは昭和期に入ってから佐渡鉱山の遺構である。

重い鉱石を処理するには位置エネルギーに逆らうのは経済的でないから、高いところから低いところに向けて作業工程が設定されている。佐渡金銀山では採石場のある大立・高任地区から鉱石選別をする高任・間ノ山地区を経て、選鉱や製錬をする北沢地区に運ばれ、さらに大間港から積み出された。

北沢浮遊選鉱場跡が大佐渡スカイラインに向かう途中にある。東西 115m、南北 80m、高さ 35m もある巨大な施設だが、全体が蔦で覆われている。

この浮遊選鉱場は金銀の量産体制の構築をめざして北沢地区に建設されたものである。品位の低い鉱石を大量にかき集め、効率のよい選鉱法によって実回収率を高めるための技術革新を担った。戦前の 1940（昭和 15）年に完成している。この周辺には、明治期に建設された鉱山本部の建物やシクナー、鑄造工場などが置かれていた。

浮遊選鉱とは、鉱石を細かく粉砕し、界面活性剤や油脂を混ぜた液体を加えて攪拌すると、鉱石は沈み、金を含んだ金属は浮くという原理を利用したものである。この施設の導入によって大量の鉱石の処理が可能になり、1ヶ月の処理量は5万トンを超えた。

シクナーは直径 50m の巨大なもので、半分以上が蔦や樹木に覆われている。こちらは不足する工業用水を確保するために水と不純物を分離する装置で、不純物は捨てられ、水は選鉱場で使われた。こちらも 1940（昭和 15）年に完成している。

しかし 1952（昭和 27）年の佐渡鉱山の大縮小により、これらの施設は閉鎖され、そのまま近代産業遺産として残されることになった。なお、この北沢地区には相川技能伝承展示館、

相川郷土博物館（現在休館中）、無名異焼^{むみょうい}の工房と直売所などが置かれている。技能伝承展示館と無名異焼の工房、直売所はちょこっと覗いた。

時間的に奉行所や鉱山跡を見学する時間的余裕がなかったので、こちらは翌日に回すこととして、大佐渡スカイラインを通過して、この日の宿である旧金井町に向かう。



北沢地区の浮遊選鉱場跡（左）、直径 50m のシクナー（右）

大佐渡スカイライン

大佐渡スカイラインは正式には県道 463 号白雲台乙和地相川線という。相川の鉱山跡から大佐渡山脈の南側の山岳地帯を抜け、旧金井町の金井運動公園に至る。冬期（11 月末～4 月末）は閉鎖される。

県道の最も高いところの標高は 1,000m なので、雲がかかる恐れがある。雲によって視界を遮られてはスカイラインを走った意味がない。この日は快晴で、山岳ドライブには申し分ない日和だったから、他所の視察に優先して大佐渡スカイラインを走ることにした。

山間部を走るから、林によって視界が遮られる。したがって木々が途切れるところからしか下界を見ることはできなかった。

やがて白雲台交流センターに着いた。ここからの眺めは絶景である。佐渡の南部が一望できる。左手に加茂湖と両津港、両津湾を眺望でき、右手には真野湾が見え、その間に国仲平野が広がる。国仲平野の中心部は田んぼで緑一色だった。集落は大佐渡と小佐渡の山際に形成されている。小規模ながら市街地を形成しているのが市役所の周辺で、佐渡総合病院、佐渡市役所、「たびのホテル佐渡」など比較的高い建物が連なる。



交流センター白雲台（左）、白雲台から佐渡市の中心地と国仲平野を望む（右）

白雲台の脇からは妙見山、金北山へと通ずる自衛隊管理道路が整備されているが、ここを通るにはあらかじめ「佐渡トレッキング協議会」への登山届が必要である。佐渡の最高峰・金北山へはこちらから登るルートと、県道 81 号のドンデン山側から登るルートがある。

航空自衛隊佐渡駐屯地

白雲台交流センターから長い坂を下る途中に航空自衛隊の佐渡分屯基地がある。かつて反戦自衛官の小西誠三曹が所属していた部隊だ。

戦後まもなく米軍は金北山山頂に日本海全域を監視するレーダーサイトを建設するが、その後、自衛隊が引き継ぎ、2010（平成 22）年から西隣の妙見山（^{みとうけんさん}標高 1,042m）山頂に移している。

全国の 28 ヶ所にレーダーが整備され警戒監視網がめぐらされている。このうち弾道ミサイルの探知・追尾に対応できる FPS が 4 ヶ所に配備されているが、このレーダーサイトはそのうちの 1 つである。レーダーを覆う円形の部分の模様が亀の甲羅に似ていることから、特撮怪獣ガメラにちなみ、「ガメラレーダー」とも呼ばれるらしい。隊員 160 人が 24 時間体制で警戒に当たっている。

近年、日本海には北朝鮮のミサイル発射が相次ぎ、中国からの気球やジェット機、あるいは無人機も増加しており、日本海をカバーする佐渡駐屯地の役割は極めて重く、日本の空の監視に重要な役割を果たしている。

レーダーのある妙見山は冬季雪で閉ざされるため、レーダーのメンテナンスには雪上車が使われている。

分屯基地から少し坂を下ったところに、新保川に造られたダム湖があった。湖面にはたくさんの大きなコイが浮かんでいた。

長い坂を一気に下り、この日の宿である「たびのホテル佐渡」に入った。5 年前にできた新しいホテルである。共同浴場が 1 階にあり、ここの湯は後述する佐渡の海洋深層水が使われている。しかしどういいうわけかしょっぱくない。どうやら RO 膜を通した淡水が使われているようだ。



山の上の航空自衛隊レーダー群、右端が妙見山のガメラレーダー（左）、麓の航空自衛隊佐渡分屯基地（右）

令和 5 年 7 月 21 日

佐渡乳業

バイキングの朝食を食べ、旅支度を整えて、8 時 30 分にホテルを出発した。近くの柵佐

渡乳業に寄り、池野一昭専務から佐渡の酪農と乳製品づくりについて取材する。

橋が架かっていない離島で牛乳が作られ、島内で販売されているのは、この佐渡島と鹿児島県の種子島、東京都の大島だけだろう。かつて北海道の3つの離島では酪農業と連携して地元で牛乳が作られていた。礼文島の「最北端の牛乳」、利尻島の「利尻牛乳」、奥尻島の「石見牛乳」である。しかし需要の低迷、牧場の後継者不足などから、礼文島は2001年に、利尻島は1991年、奥尻島は2006年にそれぞれ廃業している。伊豆諸島の八丈島でも牛乳がつくられた時期もあるが、現在はやめている。

佐渡島の現在の酪農家は7戸で、小木、赤泊、畑野、新穂の各地区にいる。全て小佐渡地区になる。

生乳は毎日、本社脇のパック工場に搬入され、1,000mlと200mlの紙パックに加工されている。一部バターも作られているので、牛乳は成分無調整と低脂肪牛乳の2種類になる。一方、チーズなどの2次加工品は新穂にある加工場で作られている。加工場の名称は「イル・クオーレ」といい、イタリア語の「心」という意味だそう。1987（昭和62）年に牛乳が余る事態が発生した時、当時の組合長の判断で乳製品の加工品づくりを島の特産品づくりと合わせて取り組むことになったものだ。現在、牛乳以外の乳製品は、バター、チーズ類がカマンベール、ゴータ、クリーム、モッツァラ、味噌漬け、カチュカマラで、この他にアイスクリームも製造している。なお、バターは売れ行きが好調で現在は手に入らない。

生乳の生産量は、近年、減少傾向にあり、令和4年度は1,252.9トンであった。このうち島外への送乳は52.8トンで、大部分が島内消費である。牛乳やチーズなどの乳製品は島内のスーパーで売られている。令和4年の販売額は3億円弱で、1,000mlパックが約0.9億円と最も多く、次いで学校給食、200mlパック、バターの順である。チーズ類は2,770万円であった。

佐渡における牛乳と乳製品生産の歴史は次のとおりである。

1955（昭和30）年に佐渡郡酪農農業協同組合連合会が設立され、翌年、工場が完成（1合瓶で8,000本の生産能力）し、牛乳の処理販売事業を開始した。1959（昭和34）年にチーズ工場を建設し、明治乳業と連携して、プロセスチーズの受託生産を始める。さらに1963（昭和38）年にはアイスクリーム事業を開始している。

その後、2004（平成16）年にJA佐渡と酪農生産者の出資により、㈱佐渡乳業が設立され、事業を開始し、JAの子会社になった。資本金は4,000万円で、出資割合はJAが3,700株、生産者が300株である。上述したように第一工場は牛乳生産、第2工場はチーズ等の2次製品を生産しているが、従業員は正社員6名、臨時12名、パート7名の合計25人（男11人、女14人）である。

なお、佐渡島では上述したような子牛の生産が盛んであるが、わずかだが和牛の肥育も行われていて、Aコープでは「佐渡牛」のブランドで販売している。島内に屠場はないので、長岡に生きたまま運んで処理している。肥育数についてはわからないとのことだった。なお、島内には牧草地は少なく、一部、飼料米のWCS（ホールクロップサイレージ）が作られているだけで、牛の餌料の自己生産は少ない。島外からの移入や輸入に大きく依存する構造になっている。



佐渡牛乳㈱のパック工場（左）、同社のチーズ工場のイル・クオーレ（右）

旧金井町

旧金井町は佐渡島のほぼ中央に位置し、市役所や佐渡病院が置かれ、今では佐渡市の中心地となっている。大佐渡山地の麓あたりには多くの集落が形成され、名所・旧跡が多い。

最初に訪れたのが北條家住宅で、国の重要文化財（建造物）に指定されている。北條家の初代・道益は漢方医で、1663（寛文3）年に直訴の罪で佐渡に流された。流罪が赦免された1707（宝永4）年に現在地に移住した。現在の建物は18世紀後半に建てられたものである。茅葺屋根の長屋門をくぐると、木造平屋建ての主屋があり、寄棟造茅葺の大きな建物が建つ。敷地内にはいくつかの蔵もあった。

続いて東平清水集落にある野村堂に行く。この本堂の開基は1742（寛保2）年とのもので、古いものだ。堂の前には5～6基の石碑が建っていた。

少し山の中に入ったところにある白山神社に行く。鳥居をくぐると順徳上皇が植えたと言われる「百足杉」と呼ばれる大きな古木がそびえていた。坂を登ったところに白山神社、貴船神社、大師堂、毘沙門堂が並んで建つ。白山神社に参詣して元に戻り、岩田集落に向かう途中に多聞寺という真言宗の寺があった。佐渡には88ヶ所霊場があるそうだが、この寺は第43番札所になっている。

里に戻り、泉地区にある黒木御所跡を訪ねる。順徳上皇が佐渡に配流となった時、国分寺が行在所として定められたが、その後、当時、国守が直接管理していた泉に仮宮を造営してこちらに移ったとされる。つまり黒木御所は順徳上皇の住まいだったところである。黒木の名称は丸木や皮附の木材で造った建物という意味のようだ。ただ後述する真野宮にも住んでいたとされ、現在では順徳上皇の佐渡での住まいは真野宮が本宅で、泉地区の黒木御所は別荘であったというのが通説になっている。しかし、泉の集落の方々は様々な文献などから黒木御所が本宅だったと主張する。

順徳天皇の父である後鳥羽上皇は隠岐に流されている。御在所は島後島という説と西ノ島という説があり、両方が本家争いをしているが、似たような現象といえる。西ノ島にある後鳥羽上皇の御在所はやはり黒木御所と呼ばれている。

黒木御所には順徳帝文学公園が併設されていて、与謝野鉄幹、斎藤茂吉、相馬御風などの歌碑がたつ。また1916（大正5）年には昭和天皇が皇太子当時この地を行啓されている。

次いで国道350号に近い泉城址を見る。1589（天正17）年に上杉影勝が佐渡を攻め、各

地の地頭を降伏させ、支配するが、この城址は本間左京のものであった。東西 50m、南北 40mの方形の小さな敷地の周りを堀と土塁で固めたようだ。



貴船神社（左）、黒木御所（右）

真野湾のカキ養殖

国道 350 号を西に進むと、海が開けた。真野湾である。海面には延縄式のカキ養殖施設が並んでいた。加茂湖は比較的静穏なことから筏式であるが、外洋に位置する真野湾は風や波浪が厳しいため、延縄式が採用されているわけだ。道路脇に佐渡漁協稲鯨支所佐和田出張所の事務所があった。事務所の窓に「牡蠣養殖事業継承者募集中」の看板が出ていたので、なかに入ると、元気のいい本間さんが対応してくれ、取材することができた。

本間さんは両津高校の漁業科の出身で、養殖歴 35～36 年のベテランであり、カキ養殖業者の中では一番の古株である。重いものを持つなど重労働がかさみ、足腰を悪くしている。

真野湾におけるカキ養殖は 1971（昭和 46）年から始まった。つまり半世紀以上の歴史がある。現在、真野湾でカキ養殖を営むのは 11 経営体である。このうちの 3 経営体は島外から来た I ターン漁師である。養殖業者の最高齢は 73 歳、これに次ぐのが 68 歳であり、カキ養殖業者は高齢化している。地元の後継者がおらず、真野湾のカキ養殖を継続するためには新たな参加者が必要との認識から、窓ガラスの看板になったものらしい。最近も島外から 2 人が着業したが、2 人ともやめてしまったという。

延縄施設 1 台は、長さ 50m 幹綱の 3 本張で、ブイを 10 個使用する。垂下連は 30 cm 間隔だが、真野湾は水深が浅いため垂下連の長さは 2 尋程度と短い。本間さんはこの養殖施設を 36 台行使している。種苗は広島県と三重県から購入している。購入した種苗を垂下連のロープに挟んで養殖する。

ただ加茂湖は種苗導入後 1 年で出荷できるが、真野湾の場合は出荷まで 3～4 年かかるという。加茂湖は栄養塩濃度が高く、河川水を通じてケイ素の流入が豊富であるが、真野湾の場合は貧栄養で河川水の流入も少ないため、カキの餌である珪藻プランクトンの生産力が極端に低いからだ。かつて真野湾の入口近くの二見でカキ養殖が試みられたことがあったが、ここは河川水がほとんど流れ込まず、結局、カキの成長不良で撤退している。

生産したカキはむき身で出荷する。主として島内消費が中心で、観光客向けの需要が多い。単価は 3,000 円/kg（殻付きの場合は 120 円/個）とけっこういい値段で販売しているが、出荷まで時間がかかることが難点だという。

近年はクロダイの資源が増えてきてカキ養殖施設の周りに集まり、カキを食べてしまうため生残が低いそうだ。また水温は以前に比べて2℃ほど上昇しているとのことで、アカモク（ナガモ）が生えないという。藻場が少なくなったからサヨリの産卵もダメになったらしい。

本間さんの隣に土建会社・坂口組社長の坂口さんがいた。組合事務所の隣の浜をボランティアで整備しているようで、整備が終わったら地引網をやる予定になっているとのこと。



真野湾に浮かぶカキ養殖の延縄施設（左）、事業所の窓に掲げられた「牡蠣養殖事業継承者募集」の案内（右）

七浦海岸

真野湾沿いの道は沢根で、山中を相川に抜ける県道 31 号と海岸沿いに二見半島を一周する県道 45 号に分かれる。二見半島を一周する道を進んだ。

須川、羽二生の集落をすぎると二見に入る。二見から米郷、^{いなくしら}稲鯨、橘、高瀬、相川大浦、相川鹿伏の7つの集落が続くことから七浦海岸と呼ばれている。半島沿いに続く約 10 kmの海岸線は冬季の季節風の影響を受けて岩が削られ、奇石が並ぶ美しい海岸である。また海の正面が西に当たることから夕陽が美しい。このため、佐渡の景勝地の一つとなっている。

二見集落の手前の埋立地に東北電力の相川火力発電所があった。出力 2.75kw の内燃力発電で、燃料は重油だ。地方港湾の二見港の構内には海上保安庁の巡視船や浚渫用のバージ船などが係留されていた。港のはずれに漁船用の斜路が整備されていたが、陸置きされている漁船はわずかだったからあまり漁業は活発でないようだ。港の用地内にかつて旧二見漁協が営んでいたと思われる水産加工場があったが、2011 年からシーサイドファクトリー(株)の二見工場となっている。同社は稲鯨に本社があり、魚の生ハムをメイン商品として生産しているらしい。

二見集落に順徳上皇が植えた梅と伝えられる「^{はつふさ}八房の梅」の碑があった。

台ヶ鼻を回った先が米郷^{よねごう}の集落である。集落の前面に米郷漁港（第1種）が整備されている。斜路には船外機を中心とする小さな漁船が引き上げられているだけだった。

稲鯨の集落の前にも稲鯨漁港（第2種）が整備されている。米郷漁港に比べると大きい。港内に 19 トン型のイカ釣漁船1隻が係留されていた。集落には大型定置網があったが、最近廃業している。そのため漁港内には広い網干場が確保されているが、定置網の廃業で遊休地化している。集落上の海岸段丘上を県道 45 号が通る。その道路沿いに「徳平」という手打ち蕎麦の店があった。ちょっと興味をそそられたが、駐車場は車で埋まっていたので、残念ながら食べるのを諦める。

橋の集落の先が高瀬^{たこせ}である。ここには夫婦岩という景勝地があり、トライブインが置かれている。道路の反対側に「佐渡風塩釜」という製塩所があった。さらに近くでは弥生時代から古墳時代にかけての洞穴遺跡が発見されている。浜端洞穴遺跡と呼ばれ、県の史跡に指定されている。

相川大浦を過ぎ、七浦海岸の北の果て、春日崎に立つ。流人で槍術家であった大岡源三郎の土塚がある。近くに「ホテル大佐渡」という絶景の地に建つ大きなホテルがあった。



稲鯨漁港と稲鯨の集落（左）、七浦海岸の夫婦岩（右）

大間港

相川の市街地に入り、最初に大間港に行く。この一帯は、土木学会の「建築土木遺産」に指定され、当時の遺産がそのまま保存されている。

大間港は佐渡鉾山の鉾石や資材を搬出入するために、明治時代に造られた港である。1887（明治 20）年に工事が始まったのだが、冬季の季節風や波浪の影響で工事は困難を極めた。愛知県などで護岸工事を手掛けた「たたき工法」の創始者の服部長七の指導のもとで、1892（明治 25）年に完成したものだ。「たたき工法」とは、コンクリートが普及する以前、消石灰と土砂を混ぜた種土に水を入れて練った「たたき」と石積みとを組み合わせたものである。

残存している主な遺跡は、①トラス橋（トロッコに積まれた鉾石を落下させ、下の小舟に積み込んだ橋）、②荷物を運ぶクレーン、③トロッコが通ったローダー橋脚の跡、④火力発電所の跡、⑤木造の倉庫などである。



トラス橋（左）、ローダー橋脚跡（右）

佐渡奉行所跡

大間港から坂を登ると、北沢地区の浮遊選鉱場跡があり、この上の高台に佐渡奉行所が再建されている。入館料 500 円を支払い、なかに入る。

江戸時代、佐渡島は徳川幕府が直接管理する天領であった。この天領を統括したのが佐渡奉行所で、1603（慶長 8）年に相川の海岸段丘の先端に位置するこの地に建てられた。他の地区の奉行所と異なり、奉行所内に住居機能、行政機能、直営工場が置かれていた。

この奉行所を鶴子^{つるし}银山にあった陣屋から相川に移したのが大久保長安である。大久保長安（1545～1613）は甲斐の国の出身で猿楽師の家に生まれた。武田氏に仕え、金山の経営に携わる。江戸時代になると、石見银山（島根県）や静岡県^{つるし}の金山奉行を歴任し、1603（慶長 8）年から 10 年間にわたり佐渡奉行を務めた。初期の相川金銀山の経営に大きく貢献したが、死後、不正蓄財を問われ、6 人の息子は切腹を命じられている。

佐渡奉行所は火事による焼失と再建を 5 回繰り返す、その都度姿を変えている。明治維新後は役所や学校として使われていたが、またしても 1942（昭和 17）年の火事で、建物全体を焼失している。現在の建物は 1998（平成 6）年に、保存整備事業によって再建されたもので、奉行所が最後に再建された 1859（安政 6）年当時の姿を再現したものだ。

佐渡奉行所の跡から 172 枚の鉛板が発掘されている。鉛一枚の大きさは平均 65×26 cm の楕円形で、重さは約 40 kg である。この鉛板は国の重要文化財に指定されている。鉛は金を精錬する時に用いられたもので、金と鉛の合金を作ることによって純金を作る灰吹法に用いられた。この技術は朝鮮半島から伝来したというのが定説で、島根県の石見银山で用いられ、全国に広まったらしい。

佐渡奉行・岡松伊予守久微が 1859（安政 6）年 12 月に佐渡奉行に任命され、翌年 4 月に赴任しているが、この時の旅行の絵図が館内に展示されていた。絵師を同行させていたらしい。江戸から中山道を通り、本庄から三国街道を進み、三国峠から長岡、寺泊に出て、船で赤泊に渡り、新町を経て相川に赴任した。当時の道中の様子がわかる貴重な資料だ。

奉行所の一段下にある寄勝場^{よせりば}は、江戸時代の金の精錬工程が再現、展示されている。パネル展示と実物模型もあり、わかりやすい。この寄勝場は石谷清昌奉行の大改革により、1759（宝暦 9）年に設けられたものである。



再建された佐渡奉行所（左）、寄勝場内の展示（右）

金鉱石から小判ができるまでの工程は、①鉱山から金銀を含む石英鉱脈を掘り出す採鉱、②碎石物からよい部分を分ける選鉱、③扣石^{たたきいし}の上ののせて鉄槌を使って鉱石を叩く粉碎、

④叩いた鉱石を石磨にかけて磨り潰す細粉、⑤船（木製の水槽）に入れて比重差を利用して金銀を採取、⑥船の底に残った沈殿物の中から「ねこ流し」（重い粒子は流れ落ちずに木綿の布目に切っかかる方法を利用した選別法）による再回収、⑦灰吹法によって鉛と合金をつくる製錬、⑧塩を加えて、塩化銀と金を分離する製錬に分けられる。このように複雑な各工程を経て、小判が出来上がるわけだ。

佐渡金銀山

佐渡金銀山は 1601（慶長 6）年に発見された。鶴子銀山の山師であった三浦次兵衛、渡辺儀兵衛、渡辺弥次右衛門の 3 人は山を越えて海岸沿いに鮎川（現在の濁川）の河口を遡り、この年の 7 月 15 日に金鉱脈を発見したのである。後に、三浦は六十枚間歩、儀兵衛は道遊間歩、弥次右衛門は割間歩がそれぞれ割り振られたという。「間歩」とは坑道のことである。

それから 1989（平成元）年に閉山するまでの 388 年間に、佐渡金銀山は、金 78 トン、銀 2,330 トンを産出し、世界有数の金銀山になった。

相川に金山が発見されると、その富を独占すべく徳川幕府は 1603（慶長 8）年に佐渡島を天領とし、佐渡奉行所を設置する。相川で算出された金銀は幕府の財政を支えたのであった。

鉱山が開発されると、後述する「道遊の割戸」に近い上相川に鉱山で働く人々の町ができた。「上相川千軒」と呼ばれた。1652 年の記録では世帯数は 512 戸に及んだ。一方、海側に佐渡奉行所が設置され、役人や商人を中心とした計画的な街づくりが進められ、上寺町地区が作られた。寺院を中心に鉱山労働者、地役人、奉公人、職人などが住んでいた。江戸中期に衰退したが、明治期には鉱山で働く坑夫の寄宿舎である大塚、太田、佐藤の各部屋が置かれ、昭和初期には鉱山長屋あった。

明治維新後は官営佐渡鉱山となり、西洋人技術者を招聘して近代化・機械化が図られる。1889（明治 22）年には宮内省御料局管轄の皇室財産となった後、1896（明治 29）年に三菱合資会社に払い下げられ、民間の鉱山として営業が続けられた。しかし 1989（平成元）年に資源が枯渇したため操業は停止され、今日に至る。

佐渡金山にはこの金銀鉱脈が合計 8 つ走っている。鉱脈の幅は 1～10m ほどだ。鉱脈の長さは東西約 3,000 m、南北約 600m で、深さは 800m に及ぶ。掘り進められた坑道の総延長は約 400 km に達するという。

江戸時代の採掘は手掘りのみであったが、明治期になると西洋の近代的技術が導入され、立坑を掘り、深さ約 30m ごとに水平坑道を掘られ、鉱脈に達したら鉱石を掘削して立坑を利用して外に運び出す近代的な方法に変わった。

採掘した鉱石は細かく砕き、金鉱石と捨石を手選、比重選鉱、浮遊選鉱などによって選別、金鉱石は水銀精錬法や青化精錬法などによって製錬された。製錬された金鉱石は島外に出荷され、精錬所で電気分解法により純金（99.99%）に精錬した。明治期は大阪精錬所、大正期以降は直島精錬所（香川県）で精錬された。

この佐渡金銀山の坑道跡や当時の作業内容を見学できるのが、㈱ゴールデン佐渡が運営する「史跡佐渡金山」（佐渡金山展示資料館）である。佐渡奉行所から大佐渡スカイラインに向けて坂道を登っていくと、旧三菱金属鉱業㈱の佐渡鉱山の建物が残っており、その先に史

跡佐渡金山がある。なお、㈱ゴールデン佐渡は明治政府から払い下げを受け、鉱山経営を引き継いだ後の三菱金属鉱業㈱（現三菱マテリアル㈱）が 1970（昭和 45）年に観光会社として設立したもので、三菱マテリアル㈱の 100%子会社である。

見学コースは宗太夫坑と道遊坑の 2 つに分かれている。宗太夫坑は江戸時代の金銀採掘を再現した手掘坑道、道遊坑は明治以降の近代鉱山の様子を公開する観光施設である。入場料はそれぞれ 1,000 円だが、両方を観る共通券だと 1,500 円に割引になる。

宗太夫坑

最初に宗太夫坑に入った。坑道内の気温は 10℃で、外の暑さがうそのようで、涼しく快適である。江戸初期の手掘り坑道跡に、「佐渡金山絵巻」に描かれた採掘作業を動く人形を使って忠実に再現している。ポイントごとに解説板が置かれており、江戸時代の金山の採掘状況がよくわかる。動く人形はメンテナンスが大変だと思うが、相当金をかけているという印象だ。

約 400 年前の鉱山の採掘作業と坑夫の職務分担は次のようなものであった。

岩盤を砕く砕石作業は、タガネを上田箸という道具で挟み、鎚で打つ手作業であった。この作業をする人を金穿大工と呼んだ。

佐渡金山の岩盤は硬いが、断層や岩質によっては崩れやすいところもあり、支柱で補強して坑道を維持する必要があった。この仕事を山留普請といった。崩れた土砂を処理する丁場穿子、坑道の支柱工事を行う山留大工、山留大工を補助する手伝穿子などがいた。

佐渡金山は開山から 100 年足らずで坑道はすでに海面下に至った。坑道が深くなると地下水が多くなり、当時は水中ポンプなどなかったから、水との戦いが金の採掘量に影響した。このため 1653（承応 2）年には水上輪すいしやうりん（長い桶の中になせん状に取り付けた板を回転させて連続的に水を吸い上げる道具）と称する水を汲み上げる手動ポンプが使われた。これを操作する桶引人足といい、24 時間連続の交代勤務で水を汲み上げた。ただ、水上輪は 40° 以上の勾配のところでは使えないため、これとは別につるべや手桶で湧水をかい出す水替人足が必要だった。この水替作業は重労働であったため江戸や大阪、長崎などから集められた無宿人（戸籍台帳と呼べる宗門人別改帳から名前を外された者）が水替人足として金山に送られた。その数は 2,000 人ほどといわれている。



動く人形を使って江戸時代の鉱山労働を再現

地底の照明は魚油を燃した（これは司馬遼太郎の記述だが、植物油を燃したという説もあ

る)。換気が悪い中、煤と悪臭が漂う劣悪な労働環境であった。このため無宿人の寿命は3～4年だったという。戸籍のない無宿人は闇から闇へと葬られた。佐渡金銀山の繁栄はこのような無宿人の奴隷労働が支えていたことは改めて認識しておくべきだろう。ちなみに囚人は粗暴で管理が難しかったから、犯罪者でない従順な無宿人が使いやすかったのである。鉱山で死亡した無宿人は現地で葬られ、そのうちのごく一部が「無宿人墓地」に眠る。

この他に坑道内の空気を入れ替える風送り穿子、横引場（検問所）を管理する人などが鉱山で働いていた。

坑道を抜けると2階の鉱山資料館に出る。1階が売店になっていて、ここから再び「史跡佐渡金山」の入口に戻る。

道遊坑

隣の入口を入ると道遊坑になる。こちらは1899（明治32）年に開削され、休山時まで使用された坑道である。後述する道遊の割戸の直下を通ることから名付けされたのだろう。坑道にトロッコの鉄路が敷かれ、炭鉱の坑道と同じようなものだ。当時使われていたトロッコもそのままの姿で置かれている。つまり佐渡金銀山の近代遺産なのだ。

明治維新後、官営佐渡鉱山になると、政府は外国人技術者の指導を得て、江戸時代の手掘りから近代的採掘法に変えた。立坑を掘ってエレベーターを取り付け、深さ30mごとに水平坑道を掘り、金銀の鉱脈に当たったら鉱石を掘り出し、トロッコで運搬、立坑から地上に運び出した。当初は英国から伝わった火薬による発破で岩を砕いたが、1881（明治14）年には日本で最初の削岩機が導入されている。

後述する大島高任^{たかとう}が佐渡鉱山局長に就任すると、日本人による最初の高任立坑が掘られ、上述した大間港がつくられた。さらに鉱石の輸送に架空索道（1,100m）が設置されている。

坑道を出たところに資料展示室と機械工場がある。資料展示室には鉱石の標本、金を保管した巨大な金庫、金の重量を計った天秤などが展示されている。また機械工場は昭和10年代に建設されたもので、当時鉱山で使用されていた機械類が保存されており、国の重要文化財に指定されている。



道遊坑の内部（左）、資料展示室に置かれている金秤量用の天秤（右）

道遊の割戸

「佐渡島の金山」の世界遺産登録のことが報じられるたびに登場するのが、この「道遊の^{どうゆう}

割戸」である。歴史を知らない者から見ると、何の変哲もない山の中央が大きく2つに裂けているに過ぎない。かくいう私もここを訪れるまでは、この山の意味がわからなかった。

地下数千mにはマグマに熱せられた熱水が存在し、金や銀が長い時間をかけて溶け込む。この熱水が断層や岩の割れ目に吹き出し、冷えて沈着して金銀の鉱脈をつくる。佐渡の場合、この鉱脈は白い石英の岩脈であり、「銀黒」と呼ばれる黒い筋の中に肉眼ではみられないほど小さな粒状で金銀が含まれている。2000 万年前の火山活動によって相川の鉱脈が誕生した。鉱脈群は道遊の割戸を中心に地上に向けて咲いた花のような形をしており、それぞれの鉱脈に名前が付けられている。この鉱脈が地表に顔を出した部分を露頭といい、この露頭が鉱脈を発見する手がかりになった。

佐渡金山のシンボルともいえる「道遊の割戸」は山の中央部にほぼ垂直にこの石英の金鉱脈が走っていた。佐渡で金山が発見されると、この鉱脈を山の上から下に向かって掘っていったのである。つまり露天掘りで、最も容易に金を含む鉱石を採掘できたことになる。この掘り進んだ場所が割れ目となって残ったわけだ。江戸時代初期の最初に金銀が露天掘りによって採掘された跡なので、「佐渡島の金山」を象徴しているのである。ちなみのこの「割戸」は国の史跡に指定されている。

遊道の割戸はその下部まで歩いて行ける。ただし、内部に立ち入ることはできない。その手前に小さな神社が置かれていた。高任神社という。高任神社は佐渡金山の守り神である「大山祇神社」を分社し、明治中期に活躍した鉱山技師・大島高任（1826～1901）にちなんで命名された神社である。盛岡藩の出身の高任は釜石で日本初となる高炉による鉄鉱石の製鉄に成功した後、1885（明治 18）年に佐渡鉱山局長に就任した人物で、立坑や大間港の建設を推進した。

道遊の割戸を眺望する高任公園から、採掘された鉱石を破砕機で細かく砕いた粗砕場を通り、トロッキの鉄道沿いを進み、トンネルを抜け、売店と資料館に戻った。

続いて山を下り、佐和田の佐渡市立佐渡博物館に向かった。



佐渡金山の象徴・道遊の割戸（左）、割戸の下部（右）

佐渡博物館

佐渡博物館は史跡佐渡金山から県道 31 号を通り、県道 45 号に合流後、真野湾沿いを走ると、国府川の河口近くに置かれている。1951（昭和 26）年に佐渡島内の有識者、学校関係者から博物館設置運動がおこり、佐渡史学会、佐渡博物学会が中心となって資料の調査や収

集が進められ、1957（昭和 32）年 9 月に開館した古い博物館である。もともと公益財団法人としてスタートしたが、その後の公益法人改革で 2013（平成 25）年 11 月にいったん解散し、翌年 4 月から佐渡市立佐渡博物館にかわっている。宮本常一はその著書の中で、「佐渡へくる人が是非見ておかなければならぬのが佐和田町八幡にある佐渡博物館である」として推奨している。

博物館では地質、考古、歴史、民俗、芸能、動植物、美術、産業の 8 つの部会を設け、展示内容の充実に努めてきた。

常設展では、佐渡島の成立、発掘された考古学的資料、佐渡の古代から中世にかけての歴史、佐渡と能、近世の歴史、佐渡の芸能、トキ、民俗と信仰などが展示されていた。また、美術工芸展示室では、佐渡が生んだ日本画家・土田麦僊^{ぼくせん}の下絵、素描、写生帖など 533 点の一部が展示されている。この資料は同氏夫人から博物館に寄贈されたものだという。

敷地内には佐渡で産する様々な種類の石を展示するロックガーデンがあり、少し高いところには茅葺屋根の旧浅島家住宅が移築されている。

博物館を出て、少し内陸部に入り、旧真野町にある妙宣寺に向かう。



佐渡博物館の入口（左）、敷地内に移築された茅葺屋根の民家（右）

妙宣寺と La Pagode

妙宣寺は、佐渡へ流罪となった日蓮の弟子である日得上人が 1279（弘安 2）年に開いた金井新保の道場の「阿仏房」が前身である。1589（天正 17）年に現在地に移転した際に妙宣寺の寺号を起こしたといわれている。なお、この場所は中世の佐渡を支配した本間氏の居城だったところだ。本間氏を倒した上杉氏の代官直江兼続によって城跡は妙宣寺に与えられ現在に至る。

境内には五重塔が建つ。新潟県内に現存する唯一の五重塔である。この塔は相川の宮大工の長坂茂三右衛門・金蔵の親子が 2 代にわたり 1825（文政 8）年に建立したものだ。五重塔の他に仁王門、山門、番神堂、祖師堂、本堂、倉裡などの建物が配置されている。

妙宣寺の前には 2 軒ほどの古い土産物屋があったが、そのうちの 1 軒は閉鎖され、もう 1 軒はラ・パゴット（La Pagode）というレストランになっていた。16 時半も回っていたが、忙しく駆けずり回っていたので昼食を食べていなかった。なんとなく洒落た店だったので中に入る。

この店は昨年（2022）年 9 月にオープンしたばかりの店だった。店名のラ・パゴットはフ

ランス語で「東洋風の塔」という意味らしい。フランス人のジル・スタッサルさんと日本人の奥さんが佐渡島に旅行に来たのがきっかけで気に入ってしまい、すぐさま引っ越してきた。奥さんは群馬県前橋市にある 2013 年設立の近代美術館で学芸員をしていた。もちろん 2 人の子供も一緒に、共同経営者の家族も前橋からやってきたという。

ジル・スタッサルさんはフランスのブルゴーニュ地方の出身で、ジャーナリストとしてミシュランの三ツ星レストランを密着取材するうちに自身も料理の世界に入ったという変わり者である。

店の営業時間は 9～21 時、火曜日と水曜日は休みである。

メニューをみてパテのオープンサンドを注文する。サラダと野菜スープ（ホウレン草、カンゾウ、ブロッコリー、トウモロコシ）、アマランサスのベビーリーフが付いた。さらにスモモのタルトとコーヒーを注文する。オープンサンドの中身は自家製のベーコン、ハム、パストラミ、サーモンフユメなどだが、ベーコンとハムはコナラを燻煙材に使っている。もちろんパンは石窯で薪を使って焼いている。

テーブルにはどこかで採ってきたタマゴダケ、アンズダケが籠に並べられ、男の子は鶏の幼鳥を抱えて楽しそうにしている。趣味が合ったので、食事をとりながら長居することになった。



妙宣寺の五重塔（左）、レストラン「ラ・パゴット」の店内（右）

国分寺と国分寺跡

続いて佐渡国分寺を訪ねた。ここは真言宗の佐渡島内最古の寺で、743～775 年の間に建てられたとされている。1301（正安 3）年に雷により七重塔を焼失、1529（享禄 2）年には伽藍も焼失したが、1531（享禄 4）年に再建されている。現在の本堂は 1674 年までに再建されたものだ。

階段を上って仁王門をくぐり、その先の正面に瑠璃堂がある。周囲に杉の大木が茂り、うす暗くなっているから古刹の雰囲気醸す。瑠璃堂は 1666（寛文 6）年にできた古いもので、屋根は茅葺である。境内には本堂、収納庫などが配置されている。寺にはだれもいなかった。

この国分寺のすぐ背後が国分寺跡になる。

聖武天皇の ^{みことり}詔により諸国に 1ヶ寺ずつ建立された国分寺の 1 つである。創建時期ははっきりしないが、764 年に佐渡国分寺として落成したと伝わる。北陸地方では珍しい瓦屋根

の佐渡最古の寺院だった。しかし、大火・落雷などによって幾度となく焼失、そのたびに再建されているが、現在は広い敷地に、金堂・廻廊・中門・南大門・塔跡・新堂跡などの礎石が並んでいるだけだ。

広い境内には正面に南大門があり、その北に中門と金堂が一行に並び、金堂と中門を回廊で結んでいた。中央の金堂は本尊仏を安置したところで、基壇上に残る礎石の状態から東西17.9m、南北13.3mの壮大な建物があったと推定されている。また金堂の東に塔が建っていた。



国分寺の本堂（左）、国分寺跡の公園（右）

真野湾

国分寺跡から旧真野町の市街地を抜け、真野湾に出る。東の両津湾と対をなすのが西の真野湾である。途中、佐渡5歳のひとつ「真野鶴」の酒蔵があった。

国仲平野の中央を流れる国府川を挟んで、雪の高浜と長石浜という砂浜が連なる。浜の沖には砂の流出を防止するためとところどころに消波ブロックが配置されていた。真野の集落は国道350号に沿って帯状に並ぶ。

塩屋崎の近くに真野漁港（第1種）が整備されている。北西風をまともに受ける位置にあるから、北西に向いた長い防波堤が造られ、漁船が一番奥まったところに造成された斜路に陸揚げされていた。真野漁港には大きな漁船はなく、磯周りを中心に操業する船外機が多い。漁港の片隅にある古びた建物に佐渡漁協真野支所の看板が掲げられている。

塩屋崎を回ったところに新潟県の旧栽培漁業センターが置かれている。このセンターの取水施設は私が以前いた会社が工事を請け負っているの、よく知っていた。しかし現在は新潟県水産海洋研究所の佐渡水産技術センターに変わっていた。すでに17時を過ぎていたのでゲートが閉まっており、取材はできなかったが、ここでは藻場回復の実用技術開発やナマコ・二枚貝類の採苗試験が行われているようだ。

県の施設の隣に旧佐渡市栽培漁業センターがある。ここは現在、(株)浦島三和が取り組むナマコの種苗生産施設になっている。旧佐和田町にある「浦島」という旅館の子会社が、市の施設を活用して最近取り組み始めたようだ。上述した真野湾のカキ養殖業者・本間さんによると、浦島という旅館は兄弟で経営しており、兄の会長が地域振興の一環として始めたという。事務所入口のドアに「持続可能なやさしい佐渡島 一切って、使って、植える」と書かれたポンチ絵が貼ってあった。どうやらこの会社は農林水産業、つまり一次産業の持続的

循環型の産業をめざしているようだ。

ナマコの種苗生産施設は黒いビニールシートで覆われていた。真っ暗な環境でナマコの種苗をつくっている。たまたま社長らしき人が軽トラに戻ってきたので見学が可能か打診したところ、断られた。やはり本間さんの話だが、ここでは中国人が働いているようだ。以前、愛媛県の興居島で中国人とタイアップしてナマコの種苗生産と養殖をしている施設を偶然見たことがある。東シナ海の海洋汚染で、中国沿岸のナマコ資源は消滅が危惧されていることから、日本にナマコの生産拠点を確保したいとの中国人の思惑と日本のベンチャー企業の思惑が一致したのだろう。



栽培漁業センター（左）、ナマコの種苗生産施設（右）

小木街道

国道 350 号を小木に向かう。途中、大須^{おおうず}、西大須^{こだつ}、倉谷^{たぎりす}、田切須^{みかわ}、高崎、椿尾^{つばきお}、羽茂小泊^{はもち}、羽茂村山を通り、小比叡^{こひえ}を経て小木の市街地に入る。国道は山中に入り、海からは遠ざかった。山は深くなく、道路脇には柿や西洋梨などの果樹園が目立つようになる。

羽茂に入ると、道路の両側に 1 対の土饅頭が現れた。一里塚という。この国道 350 号は小木街道と呼ばれ、相川の金銀山から小木を経て本土の出雲崎に渡り、金銀を江戸に運ぶ最重要道路であった。江戸奉行は 1652（承応 6）年に相川の札ノ辻を起点として、この小木街道の合計 9ヶ所に一里塚を造らせたのである。この 9ヶ所の一里塚のうち唯一現存するのがこの羽茂の一里塚であった。土饅頭の築造当初は、旅人に日陰を提供するため榎や松などが植えられたとされるが、現在その形跡は確認されていない。

小木街道はやがて山道を下り、小木の市街地に着いた。

陽が落ちかけていた。この小木の町は江戸時代の佐渡の繁栄を支えた港町だったが、今は寂しい。港の近くにある「ホテルおぎ」に宿をとった。3階建てのビジネスホテルに分類されるミニホテルだ。

膝が悪い私にとって和室は苦手である。宿に着くと、その日の取材メモを作成するのが日課になっているが、机と椅子がないと苦勞する。このホテルはシングルの洋室だったので、パソコン用のデスクもあり、かなり作業スペースも広がった。しかも 2連泊だから、収集した資料をそのままにしておいてもかまわない。

この日はきわめて遅い昼食をフランス人シェフの店で食べてきたから、町に出て食事をす

るのはやめ、部屋にこもって収集した資料を整理し、取材メモをパソコンに打ち込む作業に専念した。



羽茂に唯一残る一里塚（左）、小木で泊まった「ホテルおぎ」

令和5年7月22日

小木

小木は江戸期の佐渡の繁栄を支えた港町である。小木の町は海に突き出た城山を挟み、西側に内ノ澗、東側に外ノ澗という2つの入江を有する天然の良港であった。城山は航海の目印になったようだ。

この立地条件に着目した相川金銀山の佐渡奉行・大久保長安は小木港の築港を進め、1614（慶長19）年に小木港が開港、5人の問屋を配置し、小木に陸揚げされる品物に税金を課した。続いて1631（寛永8）年には小木港が佐渡金銀山の金銀の積出港に指定され、港と集落の整備が進む。さらに1672（寛文12）年に河村瑞賢によって西回り航路が開かれ小木港が寄港地に定められると、北前船の寄港によって益々発展したのである。

ところが小木港の最盛期の1802（享和2）年に大地震が発生、津波でほとんどの家が流出、地震で地盤が1mほど隆起し、船着き場が40mも離れてしまうという事態が発生した。これを受け1804（享和4）年には市街地近くまで船が往来できるように「三味線堀」が築造された。それもつかのま1824（文政7）年には大火が発生し、多くの家屋が焼失した。このころには三味線堀は土砂の流入によって埋まり、その機能が果たせなくなったため、堀は埋め立てられ、現在の泉町や東町が形成された。この間、貸座敷や置屋、料理屋などのサービス業でにぎわい、大いに発展したが、明治時代になると両津港が佐渡島の玄関口になり、さらに1904（明治37）年には小木を襲った大火により大きな被害を受け、衰退していくことになる。

7時45分に「ホテルおぎ」を出発し、小木の市街地を歩く。最初に小木を2つに分ける城山の手前に位置する木崎神社を訪ねた。かつての内ノ澗は小木漁港（第2種）、外ノ澗は重要港湾の小木港となっている。木崎神社は佐渡から江戸への金銀輸送の航海安全を祈願して造営された。本殿は1695（元禄8）年に荻原近江守重秀によって造営され、拝殿は1889（明治22）年に改築されている。

続いて西側の内ノ澗、つまり小木漁港に出た。広い漁港内の奥に漁船が4～5隻係留されていたが、むしろ港内の2ヶ所に整備されている斜路に30～40隻の船外機が陸揚げされて

おり、こちらが主流であった。地元で「イソネギ」と呼ぶ磯根漁業が中心なのだろう。漁港に面して佐渡漁協小木支所がある。地元で「花モズク」と呼ぶ糸モズク（ホンダワラに付着）の出荷準備が行われていた。塩蔵したモズクを冷蔵庫に保管、翌日両津の魚市場に出荷するといっていた。

続いて市街地の中心部の道を歩く。木造2階建ての家が並ぶ。小木が繁栄していたころは遊郭や料理屋で賑わっていたが、そんな昔を忍ばせる街並みだ。各商家にはその家の屋号と俳句や絵などを描いた田楽提灯が掲げられている。初めてみる珍しいものだったが、30年ほど前に商工業者が中心となって小木のシンボルにと始めたものらしい。

外ノ澗の方角に坂を下ったところに木造5階建ての旧喜八屋旅館があった。旅籠と廻船を営んでいた。現在では建築基準を満たさないとと思われるが、1970（昭和45）年まで使われていた。1905（明治38）年に2階建ての家屋を建築、1929（昭和4）年にこの建物の上に3層を増築して5階建てにしたものだった。木造5階建ての建物はきわめて珍しく、国の有形文化財（建造物）に登録されている。

ホテルに朝食は付かない。小木にコンビニもない。どこか食べるところはないかと探すと、幸い朝からやっている店が小木港の近くで見つけた。「コーヒーkaffa」という店で、トーストとコーヒーを提供している。この店のご主人は1年ほど前に群馬県から移住してきた。店内にはごま油や有機食品など喫茶店とは一見関係ない食品が売られていた。群馬県では自然食品の店もやっていたようだ。この店に佐渡にあった出版社がかつて出版した「佐渡路」（佐藤利夫・石瀬佳弘編（1973）：佐渡路、羽田文庫1）という本があった。佐渡の50年ほど前の地図があったので写真に撮った。



小木港の内ノ澗と城山（左）、小木の商家に掲げられた田楽提灯（屋号と俳句や絵が描かれている）（右）

元小木とたらい船

朝食を済ませてから隣の元小木に行く。ここは小木よりも古くから船舶の寄港地になっていたが、小木が栄えてからというもの寒村になった。現在はこの集落にある矢島と経島という小さな島が観光地になっており、たらい船（「はんぎり」とも呼ぶ）が運航されている。2つの島は橋でつながっており、遊歩道が確保されている。

島で囲われた海域は波静かなので、たらい船の遊覧コースになっている。入口に矢島体験交流館があり、ここで切符を買う。乗船料は大人600円である。

たらい船は味噌樽を半分に切ったものだ。溶岩が流れ込み、複雑かつ狭い入江が圧倒的に

多い小木半島では小回りの利くたらい船が磯根漁業には好都合だったのである。小木半島先端の白木が発祥の地と言われている。たらい船を櫓で操作しながら、箱眼鏡で海底を覗き、海藻類や貝類を採る。現在でも磯根漁業に現役として使われている。

ただ観光用のたらい船は真ん中がガラスになっていて海底の様子がわかる。つまりグラスボートようになっており、佐渡おけさの網傘を被った女性が船を操りながら遊覧する。このような観光利用は力屋観光が半世紀前に取り組んだのが最初といわれている。

たらい船の乗り場には船小屋があり、船外機が7～8隻引き上げられていた。船小屋は干満差の少ない日本海特有の形態である。

元小木の集落の上に曹洞宗の海潮寺がある。杉の木立に囲まれた境内に天然記念物の御所桜が植わっている。順徳上皇の御手植えと伝えられる桜だ。この島で上皇の権威は相当なものだったようで、上述したように御手植えの樹木はいたるところにある。



日本海特有の船小屋（左）、たらい船と乗り場（右）

千石船

古小木の隣が宿根木^{しゆくねぎ}である。県道 45 号の道路脇に千石船・白山丸の展示館が置かれている。この船は 1858（安政 5）年に地元宿根木で建造された「幸栄丸」の板図（設計図）をもとに実物大で復元したもので、地元の白山神社にちなんで「白山丸」と命名された。

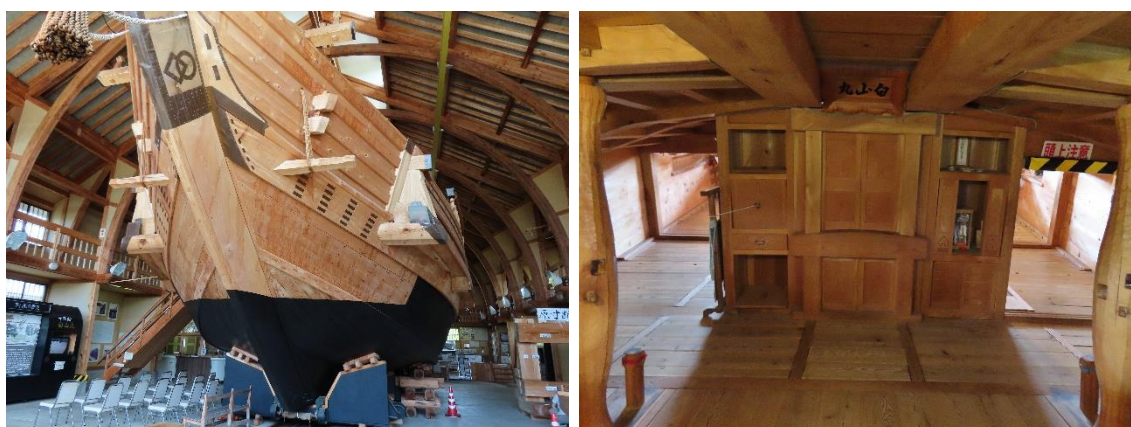
展示館の敷地には建造之碑がたっており、これによると 1998（平成 10）年に復元されたもので、事業主体は旧小木町、TEM 研究所が調査考証設計監理にあたり、施工は気仙船匠会をはじめとする小木町の船大工や町民が協力したものだ。

白山丸は全長 23.75m、幅最大 7.24m、512 石積み（約 77 トン）で、木材は杉、松（船底）、樺（舳先）、檜、樫などが使われている。建造には7ヶ月を要したらしい。そしてこの大きな船が展示館のなかにすっぽりと収まっている。資料館には復元された白山丸の他に建造経過を記録したビデオ、宿根木や北前船の歴史などが展示されている。

宿根木は中世のころ、南佐渡最大の港だった。14 世紀になると、羽茂本間氏の支配下に入る。江戸時代になり小木が北前船の西廻り航路の寄港地に指定されると（西廻り航路の寄港地は北から、酒田、小木、福浦、柴山、温泉津、下関だった）、宿根木は北前船の造船基地となり、全国から船大工や資材が集まり、千石船を造る技術者集団の町となっていく。1774（安永 3）年には船大工棟梁・喜三郎のもとに 24 人が宿根木に集まり、文政年間（1818～1830）には船大工棟梁 3 人、弟子 28 人がいたとの記録が残る。宿根木は商人と船

大工の集落として繁栄した。

しかし明治期に入ると、エンジン船の普及、鉄道網の普及によって活躍の場を失って衰退し、約 300 年に及んだ歴史に幕を下ろした。



展示館に置かれている復元された千石船（左）、神棚（右）

小木民俗博物館

千石船の資料館の隣に「佐渡国小木民俗博物館」が置かれている。

1970（昭和 45）年に小木町地区に小木小学校が新築されることになり、宿根木小学校は閉校になった。宿根木小学校には琴浦、宿根木、^{こわしみず}強清水の 3 集落の児童が通っており、最も多い時の全校児童は 140 名だった。この小木民俗博物館は廃校となった宿根木小学校の校舎を利用したもので、1972（昭和 47）年 6 月に開館している。

廃校にあたり、この校舎をどう再利用するか。弥光寺の住職であった林道明は当時頻繁にこの地を訪れていた民俗学者の宮本常一に相談する。宮本は、地元で使われず大量に遺棄されつつあった民具を収集し、博物館にすることを勧めた。

当初は老人クラブの人たち、後に宿根木や琴浦に出入りしていた東京の若者や地元の青年、そして役場職員も協力して収集作業が進められ、収集された民具は約 5,000 点に及んだ。その後、新館が増設されている。

旧小学校の教室がそのまま残され、展示室として活用されていた。最初の教室は、布や着物を展示した「衣」をテーマとし、続いて仏壇などを展示した「信仰」、再現した当時の「教室」、甕や壺を展示する「陶器」、「昔の道具」の各コーナーに分かれている。最後の旧体育館は大型の収集物の展示室となっている。

中庭を挟んだ反対側にコンクリート造りの新館が建つ。こちらには長者ヶ平遺跡から出土した縄文土器と南佐渡地方の漁具や農具などが集められており、その収集規模は 30,000 点に及ぶ。このうち「南佐渡の漁労用具 1293 点」と「船大工道具 1032 点」は国の重要民俗文化財に指定されている。

民俗学者の宮本常一は南佐渡に頻繁に来て、この民俗博物館の設立、鬼太鼓の復活、「おけさ柿」の特産化などに尽力し、かつては日本全国の漁村を中心に存在していた若衆宿の復活を強く呼びかけた。離島地域の振興を説き、社会的実践活動に貢献しているが、このことは地域の人々に多大な影響をもたらした。そしてこの思想は今日に至るまで南佐渡地域の人々によって確実に受け継がれているようだ。

かつての小学校の教室の一角に、「心を起こそうと思わばまず身を起せ」と書いた宮本常一の色紙が貼ってあった。



小木民俗博物館に保存されている旧教室（左）、「陶器」コーナーに陳列されている日本各地からの甕や壺類（右）

宿根木

小木民俗博物館から宿根木郵便局前の十王坂を下った谷戸地に宿根木の集落が形成されている。わずか1 ha ばかりの土地に 110 棟の建造物があり、高密度の集落を形成している。しかも古い町並みが今に保存されていることから、結構多くの観光客が訪れている。

この土地は中世の頃より廻船業を営む者が移住し、宿根木浦は一時期、佐渡の富の1/3ほどを集めたといわれるほど栄えたこともあるという。しかし金銀山開発に伴って小木港が徳川幕府によって整備されると、経済の中心は小木に移行した。この頃から宿根木には自前の船を持つ者が多くなり、商売を始めるものと、船大工をはじめとする造船技術者が移住し、千石船の造船基地として発展することになる。しかし明治期に入ると千石船の需要はなくなり、宿根木の人々は 1913（大正2）年に養蚕組合、1916（大正5）年に開墾組合を結成し、農業に活路を見出すことになった。

十王坂を下りたところに共同井戸、集落の山側に称光寺、白山神社、そして公民館がおかれている。ちなみに白山神社は 1304（嘉元2）年の創建と伝わる古い神社だ。集落のなかを称光寺川が流れ、その周囲に古い家並みが残されている。この川の脇に洗い場が置かれていた。

狭い土地を象徴しているのが三角家である。この建物はよく観光パンフレットに使われている。川の中洲を埋め立ててできた敷地に隣町から主屋を移築し、土地に合わせて建物を三角形にしたようだ。

宿根木の伝統的な屋根は杉の丸太を薄く割って敷き詰め、その上に重しの抑え石を並べたものだ。昭和 30 年代には瓦葺に変わるが、今でも一部の民家には木羽の屋根が残っている。

集落を抜けると、宿根木町並案内所があり、観光バスの駐車場になっている。県道を渡った先が海で、ここでは矢島にあったと同じ観光のたらい船が運航されていた。ただ前の海は千石船が入れるようなスペースも水深もなかったため、観光案内所の人に「船をここで作っていたのか」と聞くと、相馬崎隧道を抜けた先に大きな湾があり、ここで造っていたというから、歩いて見に行った。

この隧道は昭和 10 年から 5 年の歳月をかけて個人が人力で掘ったものらしい。隧道の先

は赤茶けた岩が連なり、荒涼とした風景となった。奥の入江は確かに広く、しかも深く、静かであり、奥には砂浜があった。多分ここに係留したのだろう。湾内にはホンダワラ類が勢いよく伸びており、この海域では磯焼けは心配ないようだ。45号線に引き返し、郵便局の駐車場まで戻り、小木半島を一周することにした。



今でも木羽の屋根が残る宿根木の集落（左）、狭い敷地に建てられた三角家（右）

おけさ柿

宿根木を出発してもなく、道路脇に「おけさ柿圃場」と書かれた案内板がでていた。吸いつけられるように県道45号をそれ、台地の上に車を走らせる。5～6分走ったところに「おけさ柿」の農園が現れた。

「おけさ柿」とは新潟県産の「ひらたおなし平核無」、とねおせ「刀根早生」という品種の渋柿のことで、ブランド名は佐渡の民謡「佐渡おけさ」に由来する。また種がないことが、「越後の七不思議」について8番目に不思議なことから、別名「八珍柿」ともいわれている。渋柿なので、アルコールや炭酸ガスで処理して渋を抜く。

J Aが取り扱った令和4年のおけさ柿の出荷量は5,375トンで販売額は13億円であった。これは米に次ぐ生産額であり、おけさ柿は佐渡の農業を代表する栽培種である。

佐渡でおけさ柿の栽培が始まったのは戦前からのこととおよそ80年の歴史がある。しかし栽培が一挙に広まるのは昭和30年代以降のことであった。佐渡におけるおけさ柿の主産地は羽茂、小木、赤泊である。羽茂では当初、二十世紀梨を特産品化する動きがあったようだが、県の農業技術者である杉田清は、梨の栽培は高度な技術を要し誰れもできるものではないが、柿ならば佐渡の気候条件にあうと柿の特産品化を勧めた。当時、佐渡によくきていた宮本常一も杉田の熱意に感激し、柿を普及する応援団になり、今日の産地化につながったようだ。

圃場に植わっている柿の木は樹齢50年になろうかと思われるほど太いもので、枝は横に伸び、剪定も行き届いている。私も何種類かの柿を栽培しているが、ほとんど放任状態で、しかも選定や誘引の方法を知らないものだから、このように仕立てられるように指導を受けなければならない思った次第。

なお佐渡にはJ A佐渡とJ A羽茂の2つの農協がある。J A佐渡は米が中心だが、J A羽茂はおけさ柿が中心である。後述するように羽茂港には大きなおけさ柿の選果場が置かれている。



見事に仕立てられているおけさ柿の木（左）、羽茂港のJA羽茂のおけさ柿選果場（右）

小木半島

おけさ柿の圃場から再び県道 45 号に戻り、小木半島を一周する。

強清水、犬神平を過ぎると、長者ヶ橋の上から深い入江の奥に形成された深浦の集落が見えた。入江に斜路がつくられ、さらにその奥の狭い谷あいの土地に小さな集落が固まっている。

この先が沢崎の集落で、深浦と同じような立地条件だった。沢崎は佐渡島の最西端にあたり、沢崎灯台が置かれている。

眼下に見えるこの付近の岩場は驚くほど平らである。またコンクリートを塗布したところもある。典型的な岩ノリ（ウップルイノリ）の漁場であった。これほど広い岩ノリの漁場を見るのは初めてである。岩ノリを長い間採り続けてきた結果、人の手で平らになったのか、もともと平だったかはわからない。コンクリートを塗布した場所はもちろん造成地である。日本海は干満差がわずかだから歩いて長時間岩ノリを採集することが出来るのだろう。しかも歩きやすいから岩ノリを採るには効率的である。

続いてたらい船の発祥の地とされる白木を通り、坂を下ったところが江積になる。江積の集落は山と海の間のおかずばかりの土地に帯状に形成され、その前面に江積漁港（第1種）が整備されている。こちらの漁港には船外機とともに現役で使われているたらい舟がいくつもある。またこの集落では大型定置網（石原水産）が営まれており、漁港には定置網の船と漁獲物の選別台が置かれていた。

江積と連続して田野浦の集落があり、ここを過ぎると海から離れ、しばらく集落はない。再び海に下ったところに木流、^{こながせ}小木大浦、井坪という3つの集落がある。井坪の集落近い高台には葉タバコの畑があった。また、棚田も結構作られている。井坪の先は素浜という長い砂浜が続く。砂浜が切れたあたりが羽茂亀脇の集落で、亀脇漁港（第1種）が整備されており、道は行き止まりになった。

今まで気にしていなかったが車のガソリンのメーターを見るとエンプティに近い。人気のないところでガス欠になったら大変だとかなりあわてたが、小木街道（国道 340 号）に入ると間もなく幸運にもガソリンスタンドがあった。

街道を北上し、西三川川との合流点を右折して、川に沿った山道に入る。



小木半島のイワノリ漁場（左）、深浦の典型的な集落（右）

西三川砂金山跡

西三川川を少し登ったところに「佐渡西三川ゴールドパーク」という砂金とり体験の施設があった。あまり興味がなかったので入らなかったが、室内の体験場には大勢の観光客が砂金とりに勤しんでいるが窓越しに見えた。

この西三川川流域は平安時代から砂金の採れたところである。1872（明治5）年に砂金山が閉山されるまで砂金が採られていた。相川の佐渡金銀山が発見される前の戦国時代末期には1ヶ月に砂金18枚（約2.9kg）を上杉氏に納めたことから「笹川18枚村」と呼ばれるようになったといわれている。

西三川川は途中から金山川と笹川川に分岐し、金山川沿いを登ると、やがて金山の集落に着いた。この金山の南側に笹川という集落があるが、現在、2つの集落はほぼ一体化している。笹川地区に砂金山と呼ぶ山があり、この山の金が川に流れて砂金となった。

「佐渡島の金山」は2022（令和4）年2月に、ユネスコ世界遺産へ推薦することが決定した。世界遺産の構成要素はたびたび変わったとされるが、相川金銀山、鶴子銀山とこの西三川金山の3つが世界遺産の対象になっている。

金を採取する方法は、①金鉱脈が雨や水などで削られて分離された砂金、②金鉱脈の鉱石から金を分離する、の2つであるが、西三川は①、佐渡金銀山は②である。

西三川金山が選ばれた理由は、砂金山閉山から現在に至るまで集落や周辺の山並みが保全され、「大流し」という砂金採掘による採掘地や水路・堤などの痕跡が良好に残されていることだという。大流しというのは山を切り崩し、貯めておいた水を一気に流して、土砂と比重が高い砂金を比重選別する方法である。水を流した後、川底の砂をザルにすくい上げて水をかけながら金を選別した。比重選別には大量の水が必要であったから真野川から山の中腹に水路をつくり、笹川の奥まで引いて使用したのだった。この石積みの水路跡が草木に隠れて残っている。

集落内には旧西三川小学校笹川分校の校舎がそのまま残っていた。1880（明治13）年に創立され、1962（昭和37）年に建て替えられたが、2010（平成22）年に129年の歴史に幕を下ろしている。1958（昭和33）年のピーク時には35名の児童が在籍したようだ。

金の産地が相川に移ってから西三川は衰退し、村人は農業に転換した。現在は集落にほとんど人気はなく、山の中の集落は静まりかえっている。集落の一角にある能楽堂が繁栄した

当時を偲ばせるだけだ。



砂金山の名主を務めた金子勘三郎家の修復された屋敷（左）、水を引いた石積の水路跡（右）

赤泊

県道 432 号から県道 65 号を通り、東海岸の赤泊に出る。ちょうど小佐渡山脈の山中を縦断したことになるが、通過した山中にはほとんど集落を見かけなかった。

赤泊周辺は杉の植林地が多い。

佐渡の西海岸は北西風の影響を受けるため、港は発達しなかった。一方南東海岸は大佐渡山脈と小佐渡山脈によって風が遮られるから、江戸時代から北前船の寄港地として栄えてきた。南東海岸の最大の港は小木で、こちらは天然の良港を抱えていたことはすでに述べた。小木と同様、本土との距離が最も近い赤泊は南東海岸のもう一つの代表的な港であり、江戸時代から栄えていた。

大正時代になると、赤泊と本土の寺泊の間には定期航路が開けた。しかし、両津港の発展によって利用者が減り、いったん廃止される。その後も航路の再開と廃止が繰り返され、21世紀に入ってから高速船「あいじす」が就航するが、2018（平成 26）年には廃止されている。地元には寺泊との間の航路再開の願いが強く、今年の秋には寺泊と赤泊を「高速船きらら」（粟島汽船所属）で結ぶ佐渡航路社会実験が行われることになっている。

赤泊は、このように港町として発展した歴史と旧赤泊村の役場が置かれたことから、南東海岸の経済と行政の中心地のひとつであった。

赤泊に着いて昼食場所を探す。県道脇に赤泊観光センターがあった。同センターは研修会や展示会などにも活用される公共施設で、2階に食堂がある。シーズン時期には観光客が地元の水揚げされるベニズワイガニを食べに訪れるそうだが、この日は昼食時間を大きく過ぎていたことや平日だったこともあり、客は私1人。ラーメンを注文すると、お湯を沸かし始めたので、出てくるまでに結構時間がかかった。

赤泊港は地方港湾であるが、港の北側が漁船の係留場所になっており、中央に赤泊村漁協と書かれた事務所がどっしりと構えている。現在は佐渡漁協の赤泊支所になっているが、プライドが高いのか看板はそのままだ。また漁獲物は佐渡魚市場に出荷せず、本土側に出荷する割合が高いのも赤泊の特徴である。

港にはカニ籠漁船（弥吉丸）やイカ釣漁船（第八新栄丸）などの大型漁船が係留されていた。イカ釣漁船（19 トン型）には船主の奥さんがいたので話を聞くと、スルメイカが極端

に不漁なため、マグロ釣りに転換してしのいでいるとのことだった。漁船の前のテントでは4～5人の高齢の男女が刺網の処理をしていた。また漁協事務所を挟んだ反対側の斜路にはたくさんのお磯船が引き揚げられている。

赤泊の集落は県道45号に沿って海岸線にへばりつくように形成されている。背後の台地はよく開墾されていて棚田がつくられている。集落の中心部あたりに佐渡に4つある酒蔵のひとつ・北雪酒造があった。ここの酒はホテルで「一番辛口の酒だ」といわれて飲んだ酒蔵だ。こんな小さな寒村に酒蔵があるのは、江戸時代から港として栄えた証なのだろう。

弥吉丸のベニズワイガニ直売所がやはり県道沿いにある。漁業とボイル加工、そして直売をしているから、まさに漁業の6次産業化を地でいっているわけである。店内にはゆでたベニズワイガニがたくさん売られていた。現在、佐渡でカニ籠漁業を営むのは弥吉丸だけで、2隻のカニ籠漁船が操業している。佐渡でベニズワイガニを食べたのは初日に泊まった「ホテルニュー桂」であったが、直接食べなかったものの、「たびのホテル佐渡」のレストランではカニ丼を、後述する「おぎの湯」でもラウンドのベニズワイが提供されていた。これらの飲食店で提供されているベニズワイガニは全て弥吉丸から直接供給されたものである。



カニ籠漁船・弥吉丸（左）、道路脇の弥吉丸の直売所（右）

東浦海岸（赤泊～赤玉）と林道小佐渡線

赤泊から腰細を通過、2つのトンネルを通った先が^{むしろば}庭場である。ここから長いトンネルを抜けた先が^{おおた}多田になる。多田は河内川河口にできた集落で川沿いに棚田が広がる。河口部に多田漁港（第1種）が整備され、ここに海洋深層水の取水施設などが置かれている。

多田の先が浦ノ内、そして砂嘴によってできた土地に発達したのが松ヶ崎の集落である。集落に入ると、「まちなみ保存地区」の看板が出ていた。大宝律令（701年）によって30里（現在の約16km）ごとに駅を置くことが定められると、佐渡には3つの駅が置かれた。その一つが松崎駅、つまり現在の松ヶ崎であった。残りの2駅は三川駅と^{さわた}雑太駅である。松ヶ崎が選ばれたのは越後の^{わたりべ}渡戸（現在の寺泊付近）に最も近かったことと、船を着けやすい砂地があったためである。そして明治初期まで番屋が置かれ、海上交通の要所だった。

佐渡金銀山が開発されるまで佐渡の行政の中心は国府だったので、松ヶ崎から多田にでて、河内川沿いを登り、小倉峠を越えて、国府のあった畑野に至った。このように佐渡の入口だったことから、佐渡へ流罪になった日蓮聖人や世阿弥もここから上陸したといわれている。

なお、宮本常一の記述によると、多田は小さな帆船しかなかったが、松ヶ崎には千石船が

あったという。この千石船は「春三月になると船をおろして草鞋・筵・縄・米などを積んで北海道にいった。そして江差・寿都・岩内・利尻などでおろし、ニシン粕を積んで戻ってくる。これは国中や越後平野の水田の肥料にする。それから下関までいって上方地方の雑貨類を積んできて佐渡へ売りさばいた」らしい。ちなみに帰りの荷の主なものは綿・塩・半紙・蠟などであった。

松ヶ崎をすぎると、山が海まで迫り、道は細くなる。岩首集落と豊岡漁港岩首地区（第1種）の近くに小型定置網が置かれていたが、垣網に大量の海藻が絡みつき、大きくしなっていた。東鶴島、柿野浦の集落を通過して豊岡集落と豊岡漁港豊岡地区（第1種）へ。そして立間の集落を過ぎた先が赤玉である。

赤玉は赤玉石の産地である。この周辺の山地は地すべりの多発地帯であるが、この地すべりによって赤玉石が地表に現れ、銘石として売られるようになり、赤玉を有名にした。佐渡赤玉石は石英に酸化鉄が入り込むことによって赤くなったもので、鑑賞石として珍重されているらしい。集落背後に広がる棚田に赤玉地区棚田基盤整備完成記念の石碑が置かれているが、これに使用されている石は赤玉石であった。なおこの赤玉石は上流の杉池を源流とする中川流域にのみ産するらしい。

赤石で県道 45 号に別れを告げ、新穂に至る山道に入る。集落の背後には美しい棚田が広がる。さらに登ると細い山道になった。峠付近を左折して、林道小佐渡線に入った。この林道は小佐渡山脈の尾根付近につくられていて、標高 300~400m前後の高所を通る。

林道の途中に「赤玉杉池」があり、この一帯は公園になっていて事務所も置かれていた。池に水はなかったし、事務所に人はおらず、観光客も見られない。山中は静寂が支配していた。山間部を走り続ける。対向車には1台も会わなかった。

林道の終点付近に牧場があったが、牛の姿は見えなかった。牧草地の柵の前には防疫のため立入禁止の看板が立っていた。この牧場から先は「ダンプ通行」の注意書きがあり、道幅は広がった。



赤玉集落背後に置かれている赤玉石で造られた棚田基盤整備完成記念の石碑（左）、山頂付近の牧草地（右）

海洋深層水

途中の多田漁港に海洋深層水の取水施設と分水施設、そして少し離れたところに海洋深層水利用の水産施設（種苗生産、畜養施設）が置かれていた。

佐渡の東海岸と本土の間の佐渡海峡は水深 500mを超える。佐渡海峡は盆地のような地形

なので、この層の海水はいわゆる「日本海固有水」と呼ばれている。この海洋深層水は多田漁港の約 3.7 km の沖合の水深 332m から取水している。取水管はポリエチレンライニング鋼管で内径 200 mm、延長は 3,663m である。

1 日の取水能力は 1,200 m³、深層水一部は逆浸透膜（RO 膜）により淡水化している。処理した水をブレンドし、濃縮水や高塩水などに加工している。供給能力は原水：238 m³/日、脱塩水：100 m³/日、濃縮水：150 m³/日、高ミネラル水：10 m³/日、高塩水：2 m³/日という内訳のようだ。

海洋深層水の水産施設では、エゾバフンウニが飼われていた。アワビ稚貝を育成するために使われていた循環水槽を活用し、海洋深層水と表層水をブレンドして水温を調整している。青年が 1 人で管理していたが、この事業主体は先に述べた(株)浦島三和である。そしてこのウニの餌のコンブも屋外の水槽でフリー培養していた。コンブの生育上限は 20℃ 付近であるが、海洋深層水の低温特性（原水の水温は 2℃ ほど）と栄養塩類の濃度が高い富栄養特性を活用している。この培養水槽は円形のタンク 4 基、方形のタンク 1 基であった。

一方、畜養施設では甘エビ（ホッコクアカエビ）がストックされていた。こちらはカゴ漁業の漁師が管理している。

この他に佐渡では、脱塩水はミネラルウォーターや温浴施設の水として、また塩の原料、そしてにがり豆腐づくりに活用されている。



多田漁港に設置されている海洋深層水の分水施設（左）、海洋深層水で培養中のコンブ（右）

小倉千枚田

佐渡には棚田が多い。国仲平野を除く田はそのほとんどが棚田といっても過言ではない。中でも急斜面につくられた典型的な棚田が小倉千枚田である。林道小佐渡線から県道 181 号に入り、小倉ダム近くにある小倉千枚田を見に行く。ところが右折する場所を見過ごし、長谷寺まで行ってしまった。再び県道に戻り、小倉ダムの背後の曲がりくねった細い道を登ったところに小倉千枚田があった。

佐渡における稲作は国仲平野が中心であったが、佐渡の金銀山が発見され、その採掘のために人口が増加するにつれて、土地の少ない集落では小規模な棚田を開発して食料を確保した。増加した食料需要を賄うため新田が開発され、山間部奥深くまで佐渡独特の棚田の風景を作り上げたのである。そして現在でも耕作放棄された棚田は稀で、おおむね昭和期からの耕作が続けられている。しかも畔の雑草はきれいに刈られているところが多く、佐渡人の真

面目な気風を感じさせる。

しかし高齢化に伴って耕作放棄地も出てきたことから、佐渡の農村景観を守るには全島に分布する棚田の保全が大きな課題であることとして、佐渡市の産業政策課では棚田協議会を組織し、棚田の保全に努めている。この協議会に加盟している棚田は、達者棚田、北片辺、小倉、猿八、片野尾、月布施、岩首昇竜、歌見の8ヶ所である。このうちオーナー制を採用しているのはこの小倉千枚田である。

小倉千枚田は急斜面につくられているため、棚の幅が細長く、佐渡島のなかでは最も条件が悪く、まさに典型的な棚田の雰囲気を残している。50haほどの土地が約300年にわたって耕作され続けてきたが、昭和50年代から耕作放棄が進み、荒地になっていた。2007（平成19）年度に「小倉千枚田復活事業支援協議会」が立ち上げられ、翌年からオーナー制度とボランティア活動を導入して、棚田の一部が復活した。標高は350～400m付近である。

各田には区画番号とオーナーの名前を書いた立て札が立っていた。現在、復活しているのは2ha、63枚分である。つまりオーナーは63人いることになる。「小倉千枚田管理組合」を中心に、オーナー制度とボランティア活動に支えられて、保全管理に努めている。

農水省は全国の棚田を紹介するパンフレットを作成しているが、佐渡の棚田は小倉千枚田の他に、岩首昇竜棚田、月布施棚田が掲載されている。



急斜面に造成された小倉千枚田（左）、小倉ダム上流の他の棚田（右）

おぎの湯と鮎屋

小倉千枚田の下の小倉ダムから小倉峠を経て多田に出る。かつて松ヶ崎から国府に通じた道である。途中の道路は工事中だったので回路を通る。多田の集落に入ると、海洋深層水をRO膜で淡水化し、ミネラル分を調整して（2種類に分かれる）、ボトリングするミネラルウォーター工場があった。新潟県佐渡海洋深層水㈱（N I S A C O）の工場で、「中硬水300」と「軟水50」という2種類を作っている。

県道45号に出て、一路、小木のホテルに向かう。

小木には温泉が出る。市街地を見渡せる「おぎの湯」に出かけた。この温浴施設には宿泊施設も併設されている。当初、ここに泊まる予定だったが、いくら電話しても出ないため諦めたのだ。温泉水はアルカリ泉である。客は私の他に1人だけだった。ひと風呂浴びてから小木の市街地がよく見える食堂に行き、何も食べずに市街地の写真を撮った。

昨日は小木の連泊するホテルに入ってから資料整理とメモ作成に終始し、小木の夜の街を歩いていなかったのので、夕食を食べに外に出た。小木の飲食店は 10 軒ほどである。佐渡の水産物の利用状況を調査すべく鮭屋に行った。

宿の近くの「栄寿司」は客はおらず、大将は高齢で、奥さんが手伝っていた。ショーケースの中のネタはサーモン、ホタテ貝、アカガイ、アナゴなどである。何れも島外から仕入れてきたものばかりだ。島で獲れたと思われるものはマアジぐらいなので、マアジの刺身とイカの塩辛を注文し、生ビールを 1 杯飲んで、そそくさと席を立った。

物足りないから鮭屋のハシゴをする。少し歩いて中心商店街の「魚留」に入った。こちらは観光客とおぼしき若い人が大勢いて賑わっている。大将も若い。初めに大将に「両津の魚市場に行くのか」と聞くと、「遠いから行ってられない」との返事。職人魂がないとがっかりした。ネタを見ると先ほどの鮭屋よりはましたが、佐渡産のものは少ない。突き出し（魚を揚げた酢の物）とキジハタの刺身を食べ、佐渡の地酒を 1 合飲んで、海苔巻きを食べて店を出た。



おぎの湯から見た小木の市街地（左）、小木の鮭屋（右）

令和 5 年 7 月 23 日

佐渡縦貫線（県道 81 号）

小木から海岸沿いの県道 45 号を羽茂港に向かう。羽茂港は大きな港湾で、JR のコンテナ多数が積まれていた。また JA のおけさ柿選果場がある。ただしまだ収穫期は先なので閑散としていたが、収穫期にはこの港から出荷されるのだろう。プレジャーボートが港の隅に 10 隻ほどと陸域に 7～8 隻置かれていた。

羽茂港の交差点から県道 81 号に入り、羽茂川沿いを登る。川の両側にはかなり広い水田が広がる。

羽茂本郷は旧羽茂町の中心地である。市街地に入っすぐに市立南佐渡中学校、さらには県立羽茂高校が道路の両側にあった。しばらく先には佐渡市役所の羽茂支所がある。羽茂城跡を探したがよくわからない。羽茂城は羽茂本間家の居城で、上杉景勝によって落城している。羽茂本郷にはローソンがあり、ここで朝食のパンを購入。

羽茂川沿いを登り、羽茂飯岡の集落を抜ける。川沿いに木下産業㈱というコンクリートとアスファルトの中間処理施設があった。

内陸部の比較的大きな集落が羽茂大崎である。農協の大崎支所が置かれ、対面に蕎麦の予

約受付や「コーヒーあります」の看板が掲げた店があった。その前に無人の店舗があり、たくさんの古本が売られていた。一冊 100 円均一である。中には吉本隆明の本もたくさんあるではないか。おそらく私と同じ「政治の季節」を過ごした世代の人が、ここに I ターンしてきたのだろう。もう先が見えて、本を処分することになり、売り出したに違いないが、果たしてこんな田舎で買う人がいるのだろうか。少し先に大崎活性化センターがあり、脇には長塚節の文学碑も置かれていた。



羽茂大崎地区の集落と田園風景（左）、手打ち蕎麦やコーヒーを提供する店（右）

大滝楽舎と川茂杉

大崎の集落を見下ろせる高台に旧大滝小学校の建物が残っていた。旧校門の前に「明治の写真展」と書かれた看板が立っていたので中に入った。草刈りをしていた同世代と思われる男性が写真を展示している校舎の 2 階へと案内してくれた。

ここは 2010（平成 22）年に閉校になった大滝小学校の旧校舎を活用、翌年 8 月に開所している。「大滝学舎」といい、いわば郷土の文化資料館である。地域おこしの一環としてボランティア市民団体南佐渡移住者お世話本部が運営しており、佐渡島内外の地域コミュニティとしても機能している。

館内には明治初期から昭和初期にかけての南佐渡地方の芸能や風俗を記録した民俗資料、民芸品、装飾品、衣服、竹細工や藁細工による玩具等が展示されている。特に、民俗学の考察において参考となる明治初期の記録写真、羽茂大崎集落に伝わる伝統工芸品が充実しており、文楽のジャンルに相当する重要無形民俗文化財の一つである「文弥人形」の木彫人形や史料も展示されている。

展示物の中に羽茂味噌合資会社（後の株式会社マルダイ）の古い写真が何点も掲げられていた。同社は佐渡を代表する味噌の大手メーカーで 1898（明治 31）年に創業している。しかし 2003（平成 15）年 2 月に倒産し、105 年の歴史に幕を閉じた。同社は島である立地条件を活かし、満州から大豆を直接輸入し、日本を代表する企業へと成長した。佐渡の人々が誇るべき企業だったのである。

明治の写真は羽茂大崎生まれの写真家・葛原五雲が明治末から昭和初期にかけて撮影したものである。乾板に残されていたものをプロの写真家の協力を得て再現したようだ。

大滝楽舎の収集物は佐渡の民俗学的資料してきわめて貴重なものだが、予算も人手もないことから、残念ながら雑然としている。

続いて羽茂滝平の集落である。この途中にアスパラガスを栽培している農場があった。

羽茂滝平を過ぎて川茂^{かわも}に入る。道路から小さな川を渡った先に五所神社がある。朱色の太鼓橋を渡る手前に大きな一対の杉の大木が立っていた。樹高約 30m、幹周 5.21mで、樹齢 800 年以上と推定されている。

このスギは川茂地区に自生する天然木である。川茂地区は両津の羽黒地区とともに杉材の産地として古くから知られ、江戸時代には約 45ha の杉御林があった。しかし明治以降に伐採が進み、跡地に成長の早い県外産のスギが植えられたため、もともとあった川茂地区固有の自生スギは激減した。このため五所神社のスギは遺存種として貴重な存在となっている。なお、この神社では御田植神事が毎年 2 月に営まれている。

川茂は旧赤泊村に属する山村であるが、羽茂川の最上部に相当し、ここには現在外山ダムがつくられている。ここから県道 81 号は山の中に入り、細い道路となった。人家のない山道を下っていくと猿八に出る。

山を下ると大久保の集落になる。集落を流れる小倉川ではアユを釣りの人がいた。



文弥人形の製作工程を示す展示（左）、五所神社の川茂杉（右）

大膳神社と下国府遺跡

飯持^{いもち}の集落で県道 65 号と合流した。ここから真野方面に向かい、大膳神社の能舞台を見る。1846（弘化 3）年に再建されたもので、県の有形民俗文化財に指定されている。

大膳神社には、正殿に御食津神、左殿に日野資朝^{すけとも}、右殿に大膳坊が祀られている。日野資朝は後醍醐天皇の側近だった人物であるが、「正中の変」で佐渡に流罪となる。資朝の子・阿新丸が佐渡にやってきたが、地頭の本間山城守は対面を許さず、資朝を処刑してしまう。阿新丸は山城守の太刀をとり本間三郎を討ち、京に戻った。逃亡を助けた山伏の大膳坊は処刑された。しかし本間山城守は大膳坊の怨念を鎮めるためにこの神社を勧進したと案内板に書かれていた。

大膳神社の境内にある能舞台は 1846（弘化 2）年に再建されたもので、佐渡島内に現存する 35 の能舞台の中では最も古い。佐渡の能舞台の多くは風雨をさけるために雨戸が設けられているが、この能舞台は開けっ放しになっており、舞台に描かれた松と熊笹は色鮮やかであった。佐渡に能の広がるきっかけとなった国仲の 4 つの能舞台を「国仲四ヶ所の御能場」と呼ぶようだが、大膳神社はその一つである。

大膳神社から県道 65 号に戻ったあたりに下国府遺跡があった。平安時代前期の遺跡で、

1976（昭和 51）年に国の史跡に指定されている。二重の堀によって囲まれ、内部に2棟の掘立柱の建物があった。外堀の大きさは 32×36mで、内堀との間に土塁が造られていた。この遺跡からは9世紀初めごろの各種須恵器と土師器が出土している。

この遺跡はその特色ある構造、地名、歴史的環境などから国府に関連する官舎だったのではないかと推測されている。



大善寺の能舞台（左）、下国府跡（右）

順徳天皇と真野御陵

県道 65 号を直進し、途中から山の中に入る。道路の左手に佐渡歴史伝説館と真野宮が並んでいる。前者は佐渡に流罪となった順徳天皇、日蓮聖人、世阿弥をロボットで紹介する民間施設でレストランが併設されている。あまり興味がなかったのこちらはパスした。

この施設の奥に真野宮が置かれている。真野宮は順徳上皇（第 84 代天皇で、1221 年に上皇に退く）と、菅原道真、日野資朝（正中の変で佐渡に流罪）を祀る神社である。順徳上皇の御火葬塚を管理していた真論寺が明治維新後の廃仏毀釈により 1874 年に県社となり、真野宮と改称したものだ。現在の社殿は 1920（大正 9）年に造営されている。

ここから 2 kmほど先に「真野御陵」がある。駐車場の近くに土産物屋が 2 軒あったが、観光客は 1 人もいない。建物の裏には大きな赤玉石がたくさん売られていた。何 10 万円もする庭石であるが、観光客の中に衝動的に買う人がいても年に数回あればいい方で、いったい商売として成り立つのかと他人事ながら心配になる。

順徳上皇は父親の後鳥羽上皇とともに 1221（承久 3）年の「承久の乱」で鎌倉幕府に敗れ、父は隠岐（道後島か西ノ島かはっきりしない）に、順徳上皇は佐渡には配流になったことはすでに述べた。順徳上皇は 21 年間在島し、1241（仁治 3）年に佐渡で崩御した。時に 46 歳であった。この真野山で御火葬後、遺骨は翌年 4 月に藤原康光によって京都に帰られ、大原の後鳥羽上皇墓所の傍らに埋葬された。もとは「真野御陵」と称されていたが、1889（明治 22）年に大原の墓所が陵に定められると、ここは正式には「御火葬塚」と呼ばれるようになった。現在も宮内庁が管理している。

真野御陵は一時期荒廃したが、1678（延宝 6）年に佐渡奉行が幕府の許可を得て、翌年には 50 間（90m）の現在の領域に修復している。また外側の石垣は 1875（明治 8）年に相川県参事によって修復されたものだという。

真野御陵の正面近くに、吉田松陰と宮部鼎蔵の漢詩の石碑が置かれている。吉田松陰は会

津若松から新潟に入り、出雲崎から佐渡に渡り、真野御陵を参拝している。出雲崎では天候が悪く 14 日も船待ちにあったらしい。インターネットでこの詩の内容を調べると、次のような書き下し分になるようだ。

異端邪説、斯の民を誣(し)ふるは、復た洪水禽獸(きんじゆう)の倫(たぐひ)に非ず。

苟くも名教維持の力に非ずんば、人心將に義と仁を滅せんとす。

憶ふ、昔姦賊(かんぞく)國均を乗(と)り、至尊蒙塵(かうじん)して海濱(かいひん)に幸(さち)し賜ふ。

六十六州 悉く豺虎(さいこ)、敵愾(てきがい)勤王一人もなし。

六百年後壬子(じんし)の年の春、古陵に拜す遠方の臣。

猶ほ喜ぶ人心は竟に滅せず、口碑 今に於て傳ふ事新たなるを。

また、真野御陵から下った集落には順徳天皇が手植えされたと伝えられる「石抱の梅」があった。この梅の木は根元に大石を抱えていた。



真野宮 (左)、宮内庁が管理する順徳上皇の御火葬塚 (左)

コンビニとAコープ

国仲平野の中心を流れるのが国府川である。川を渡り、佐和田の中心市街地を見に行った。商店街はシャッター通りと化していた。

全国の離島にはコンビニのない島が圧倒的に多いが、日本一大きい佐渡島にはさすがに7店のコンビニがある。しかし、全てローソンである。2店舗ほどのぞいたが、売られている商品類(おにぎりや調理パンの類)はすべて島外のものばかりである。しかも遠く東北の方から海を渡ってやってきたものもあった。せめて地元の佐渡牛乳の牛乳や乳製品を置いてもよさそうだと思うのだが、佐渡産のものは一切ない。ローカルな商品を取り扱う権限がオーナーには与えられていないようだ。また消費人口の少ない佐渡では複数のコンビニ会社が進出できるほど需要は多くない。つまり競争的環境にないから売られている商品はことごとく魅力を欠く。

昼食の時間になった。コンビニの弁当やおにぎり飯には全く購買意欲が沸かなかったので、佐渡市役所近くのAコープ(JA佐渡)に行った。ここは通常のスーパーの機能に加えて「新鮮空間よらんか舎」という産直コーナーが併設されている。コンビニとはま逆で、佐渡産の品物が圧倒的に多い。ここで炊き込みご飯と総菜品、佐渡牛乳を購入し、車の中で食べた。

佐渡にはAコープの他に、「フレッシュマツヤ」という比較的大きな食品スーパーがある

が、商店のほとんどは国仲平野に集中している。大佐渡や小佐渡の海岸線には大きな商店は皆無の状況である。

この日は前々日に夕食を食べたラ・パゴットのメンバーが島の駅「佐渡特選」という場所で直販のイベントを行う日に当たっていたので引き続き出かけてみた。旧消防署の跡地を利用した直売施設で、島外からの移住者が中心になってやっているらしい。道がわからなかったので地元の人に案内してもらったが、土地の人はあまり利用していないとのことだった。ラ・パゴットの出店で、クロワッサン2個を購入する。ここではバングラディッシュから来たという日本語の達者の若い女性を紹介された。



消防署跡を活用した島の駅・佐渡特選（左）、ラ・パゴットのメンバーのパン売り場（右）

両津郷土博物館

続いて両津の博物館に行く。両津郷土博物館は、加茂湖の畔、佐渡空港の近くに置かれている。もともと両津市の博物館として発足し、市町村合併でいったん閉館になったが、両津郷土博物館として再出発したものだ。館内は3つの展示室に分かれている。

1階の第1展示室は漁業に関するコーナーで、両津湾の漁業、加茂湖のカキ養殖に関する解説や漁船、漁具類が展示されている。第2展示室は「くらしと木」をテーマとしたコーナーで、山仕事や木工加工に使った道具類、臼や桶などの木製生活用品などを見ることができる。特にたらい舟として活用された大きな味噌樽は目を見張るものがある。第1と第2の展示室の間はトキに関する資料や絵が展示されている。



佐渡郷土博物館の外観（左）、第2展示室の木製の桶や樽類（右）

2階の第3展示室は「祭り」のコーナーで、文弥人形、能、村の行事などの紹介や展示に

加えて、北一輝の「霊告日記」の実物が置かれていた。大きな文字で独特の書体である。

1階の書籍コーナーで佐藤利夫編（1994）：昭和佐渡事情（上）を見る。漁業に関する記述の一部を写真撮影した。

郷土史家・渡辺さん

大学同期の小田秀夫さんは佐渡の羽茂の出身で、首都圏佐渡会でも活躍している。佐渡を訪問するにあたり、佐渡の生き字引ともいえる郷土史家の渡辺和弘さんを紹介していただき、佐渡に行った時は是非訪ねるようアドバイスを受けていた。

佐渡に着いてから、事前に連絡をとっていたので、渡辺さんがふだん詰めている両津港にある佐渡観光情報案内所に15時に伺った。

渡辺さんは昭和22年生まれで、私と同じ「団塊の世代」のトップランナーである。現在はボランティアで佐渡の観光・歴史ガイドを務めている。自らホームページで「佐渡人名録」を公表し、佐渡出身者の人的情報や資料を提供し続けている。きわめて豊富な内容で大変参考になる。

外に出て、両津の街の案内を受けながら、佐渡の話を聞く。話の内容は多岐にわたり、予備知識がないとなかなか理解できないが、幸い、佐渡滞在6日で、佐渡のことは概略頭に入っていたから、より知識が深まった。お聞きした内容は次のとおりである。

日本島嶼学会の長嶋さんのこと、佐渡出身の看護師に面倒を見てもらった漫画家の話、金北山と自衛隊、姫埼灯台、新潟港の開港と両津港の分港化、両津に滞在した津田梅子ほかの女性通訳、新潟地震と佐渡を襲った津波、加茂湖の開削、佐渡ヶ嶽部屋のルーツ、両津港の成り立ち、北一輝と吟吉兄弟、尾崎紅葉と村雨の松、本間家のこと、小説・胡蝶の夢と司馬凌海（島倉伊之助）、山本悌二郎と有田八郎（三島由紀夫の「宴のあと」のモデル）兄弟、三島裁判の裏舞台など

続いて渡辺さんの車で新穂城跡に連れて行ってもらう。

上杉景勝が支配する以前の佐渡の戦国時代は多くの戦いがあり、そのために館の周囲に土塁を築き、さらにその外側に濠をめぐらせて防備にあたった。その館が比較的保存されているのが新穂城跡である。宮本常一によると城と呼ぶよりも館に近い。

この城郭は約100mのほぼ正方形で、館を取り巻いていた土塁は大部分失われているが、外周には幅約20～25mの濠が今でも残っている。そしてこの濠はハスで覆われていた。



村雨の松（左）、新穂城跡堀跡の蓮（右）

14 世紀ごろにつくられたようで、1448（文安 5）年には新穂有時、戦国末期には本間備前守などが城主だったことが確認されている。1589（天正 17）年に上杉景勝の佐渡侵攻によって滅亡し、城館跡は農民などに開放された。

案内板に書かれていた地図によると、周囲 4 km ほどの範囲に 12 の館が確認されており、渡辺さんが指摘されていたように、現在の自治会館みたいなものだったのだろう。

両津港に戻り、駐車しておいたレンタカーに乗り、水津の宿に直行した。

令和 5 年 7 月 24 日

佐渡魚市場

水津集落の「旅荘さか」を朝食前の 5 時 30 分に出発し、両津港にある佐渡魚市場に向かった。魚市場に卸売人共同計算センターが併設されている。

市場には基本的に部外者は入ることはできないが、見学者用の札をもらえば場内への立ち入りが可能である。元販売課長で定年後再雇用されている甲斐さんに話を聞いた。

佐渡魚市場は正式には佐渡水産物地方卸売市場といい、平成元（1989）年に現在地に設立された。佐渡島島内の佐渡、水津、加茂湖、羽吉浜、内浦、内海府、姫津の 7 漁協を開設者とする共同産地市場である。島内の全漁協が共同で産地市場を形成する事例は非常に珍しかったので、発足数年後に調査したことがあった。したがってこの市場を訪ねるのはおよそ 30 年ぶりになる。

市場は通常、土曜日が休みだが、現在はイカ釣の関係で日曜日が休みになっている。

市場は 6 時から荷受けが始まる。島内各地から、漁協や支所単位で集荷される。基本的には車が使われている。ただ市場に近い漁業地区では個人や仲間内で持ち込むケースが、また定置網のように漁船で直接水揚げするケースもある。

集荷した水産物は生鮮品と活魚に分けられ、生鮮品は魚種別・出荷者別にスチロール箱などに入れて市場の床に並べる。活魚は水切りができるプラスチック製の容器に収容し、活魚水槽に並べられる。

7 時に販売が開始された。取引方法は発声ゼリである。若いセリ担当者が一箱ずつセリにかける。帽子に付ける黄色の札は代行、青色の札は仲買人本人と区別されている。

買受業者は 60 社前後で、けっこう入れ替わりがあるようだ。このうち島外への出荷仲買が 6 社である。残りは島内の流通業者で、スーパー、ホテル・旅館、鮮魚商、加工業者などだ。この日は入荷量が多く、7 時以降も入荷が相次ぎ、8 時 30 分ごろまで続いた。

佐渡の漁業で述べた通り、佐渡の漁業で最も生産額が多いのが大型定置網である。アジ・サバ・イワシなどの単価の安い多獲性魚を多く含むことから数量ベースではさらに多くなる。市場に入荷する大型定置網は、両津湾側が鷺崎、北小浦、黒姫、平松、和木、白瀬、羽吉浜の 7ヶ統で、島の西側に相川の達者大謀、高干外謀、小木半島の江積水産の 3ヶ統あり、主力は両津湾になる。遅くなって白瀬の定置網が入港してきた。乗組員 9 人が魚倉から選別台に魚を揚げ、市場の施設内で箱立作業開始した。

佐渡の定置網はおおむね 7 月一杯までで、いったん引き上げる。台風を避けるというよりも夏は魚が少ないためだ。達者定置のようにすでに引き揚げている地区もある。そして 9 月中旬から 10 月にかけて再び冬網を設置する。冬網はブリ用になる。

この日市場に並んだのは、サザエ、イワガキ、アワビ、花モズク、石モズク、スルメイカ、アジ、カレイ類、マダイ、タラ、ブリ・イナダ、キジハタ、ヒラマサ、ヒラメ、カワハギ、シイラ、チダイ、レンコダイ、小アジ、小イカ、メジナ、トビウオなどで魚種は多種類に及ぶ。地元でタカナとよぶハチメ（メバルの種類）は魚体表面が乾きやすいようでトロ箱に蓋をしていた。活魚水槽の魚介類はタコ（地元ではインダコと呼ぶが、マダコのような）が最も多く、続いてヒラメ、オコゼ、コチなどもいた。

この日の水揚げが目立ったのはサザエである。漁期は6～7月が盛期で、刺網と素潜りで漁獲する。また、花モズク（ホンダワラモズク）と石モズク（イワモズク）の出荷量も多かった。モズクは塩で揉んで出荷するので、1～2週間後に販売にかけられる。定置網に次いで生産額の多い刺網はこの時期は少ないようで、アカガレイが少し水揚げされていただけだった。

なお佐渡で獲れた水産物が全てこの市場に出荷されるわけではないことはすでに述べた。一部は新潟市内の魚市場に直接出荷する漁業者もいる。地域別では赤泊が多い。佐渡魚市場の取扱金額は、これまで20億円前後で推移していたが、最近はブリの不漁と釣イカの不漁が重なり、大きく落ち込んでおり、2021年は13.8億円であった。金額が多いベスト5は、スルメイカ、ブリ類、サザエ、メジマグロ、ハチメ類である。この年の佐渡島全体の生産額は20.6億円であったから、佐渡魚市場への出荷割合は67%ということになる。



佐渡魚市場におけるセリ風景（左）、大型定置網からの水揚げ（右）

水津の刺網

佐渡魚市場のセリは続いていたが、途中で切り上げて宿に戻る。朝食は飯一膳、みそ汁、茄子・ピーマン煮、納豆、冷奴、目玉焼き、サラダ、焼き魚であった。

朝食後、ご主人の坂政臣（72歳）に漁業の話を聞く。

彼が営む漁業は、刺網とタコ箱漁業である。刺網の漁獲対象は季節によって変わり、12～1月はアンコウとズワイガニ、2月～5月はウスメバルが主な漁獲対象である。6～8月の刺網は休みで、タコ箱漁業に従事する。8～9月はアカムツ（ノドグロ）、10～11月はズワイガニを主に狙う。ズワイガニの解禁はオスとメスで異なり、オスガニは10月から、メスガニ（セイコガニ）は11月から解禁になる。メスガニはオスガニよりも浅いところに生息しており、産卵期になると水深200m付近まで移動してくる。この間、カレイ類は周年漁獲対象になっている。ただ魚種によって分布水深は異なり、ソウハチガレイは水深180～250

m、アカガレイは少し深く 280m付近に分布する。カレイ類の他にはケガニも掛かる。

刺網の高さは狙う魚種によって異なり、カレイ類で4 mほど、ノドグロで5 mほどである。また刺網の長さは坂さんの場合は約1 km、長い人だと1.5 kmほどになる。

6～8月はタコ箱漁業にかわる。タコ箱は自由漁業でかつては周年操業していたが、設置してあるタコ箱を底曳網がひっかけてトラブルになった。これを契機に、漁期が調整され、底曳網の禁漁期にタコ箱を操業するようになったという（新潟県の行政は底曳網の優先している結果だそう）。なお佐渡ではタコ籠漁業は禁止されている。この底曳網は本土側で営まれている。佐渡にも2隻の底曳網漁船がいたが、現在はゼロになっている。

底曳網とタコ箱は、ともに佐渡の東側と本土との間が漁場だ。いわゆる佐渡海峡で、中央部は水深500mを越える。操業海域は、佐渡側は佐渡島から4カイリ、本土側の寺泊は6カイリと定められている。漁場は近く、港から20分ほどで着く。したがって油代は月1,500リットルもあれば十分とのことで、漁場が近いことは佐渡の漁業者にとっては有利である。

刺網は船に揚げるとすぐに漁港に戻る。網から漁獲物を外すのは陸上の作業になる。網には魚介類の他に海藻やゴミなどが掛かるため、魚外しと網の清掃は大変な作業だ。坂さんのところでは、網の処理作業のために9人を雇っている。年々高齢化と人口減が進む中でこの網処理の労働力を如何に確保するかがこれからの大きな課題になっている。なお刺網を設置している日数は魚種によって異なる。カレイ類を対象とする場合は3日ほど置く。ケガニの場合は1週間ほど置くので、骨だけになった魚などが残り、網の掃除が大変のようだ。

甲斐崎圭さんという方が坂さんのところによくきて取材し、「旅する胃袋」という本にまとめているが、この中で坂さんのタコ箱漁業が紹介されている。

水津地区には最盛期に15軒の民宿があったそう。しかし子どもたちは都会の学校に行くと島には戻らない。したがって民宿を継承する後継者がいなくなり、水津の民宿は年々減少したという。現在、水津地区の民宿は坂さんのところだけになっている。ちなみに坂さんの息子は島に残っている。



水津の集落と漁協の建物（左）、刺網の処理作業（右）

また、漁師も年々減っている。30歳前後の若い漁師もいるが、彼は無駄な漁業はしない方針で、経費が掛からないノドグロ（ノドグロは冬場になると高くなり、10,000円/kgに跳ね上がる）やアンコウ狙いの釣りや潜水漁業をメインにしているという。坂さんの時代と異なり、若い漁師は効率を重視し、仕事の仕方が変わってきたそう。潜水漁業で漁獲されるサザエは最近値がよく、アワビが獲れば1日で10万円ほどの収入になるそう。網外

しの労力が掛かる刺網漁業には見切りをつけているのだろう。刺網の処理にかかる労働力確保が難しくなっている今日、この青年の選択は正しいと思う。

赤玉から両津

坂さんに話を聞いてから宿を出発。まずは東海岸の赤玉の集落まで走る。赤玉から県道45号を両津方面に戻りながら、海岸沿いの集落を訪ねた。

9時07分に赤玉の集落を出発する。赤玉は赤玉石を産することで知られている。赤玉石はケイ素の結晶に赤みを帯びた酸化鉄が入り込むことによってできたもので、銘石や鑑賞石として全国的にも名高いことはすでに述べた。

続く集落が^{あわび}蛸で、ここには斜路が整備されているだけで船外機は少ない。蛸と東立島と^{ひがしこわしみず}東強清水の集落は隣接している。各集落に漁港はない。

野浦の集落の入口に野浦伝統芸能伝承館が置かれていた。この集落には文弥人形という1人使いの人形劇が伝えられている。集落の先には斜路の上につくられた舟小屋があり、10隻ほどのプレジャーボートが置かれていた。

野浦の次は^{つきふせ}月布施、さらに片野尾と続き、水津に至る。

ここまでは山が海まで迫り、狭隘な海岸線の土地に道路と並ぶように集落が形成されている。片野尾の背後の高台には棚田がつくられていた。また風島という小さな島があり、ここに風島弁天が置かれている。片野尾にある大平山はトキが最後まで棲んでいた山である。1981（昭和56）年に人工増殖にきり替えられたものの、2003（平成5）年10月にもともと佐渡島に生息していたトキは絶滅した。

水津は東海岸の先端にあたり、この付近の中心集落である。水津漁協の事務所があり、その前面に水津漁港（第2種）が整備されている。刺網を処理する小屋が4つ置かれ、そのうちの一つでは作業が行われていた。

水津の岬を回ると、山が海から少し離れ、道路脇に棚田が出現した。野城の小さな集落から佐渡島のほぼ東端に位置する姫崎に姫埼灯台が置かれている。車のすれ違いが困難な細い道を進むと展望台があり、そこから白亜の六角形の灯台を見ることができる。1895（明治28）年に点灯した佐渡で初めてできた灯台で、現役の鉄製灯台としては最古であり、「世界の灯台100選」や「日本の灯台50選」にも選ばれている。

続く集落が大川で、姫崎から仏崎にいたる約2.5kmの間に50戸の家がある。通り過ぎた野城は大川集落に含まれる。背後の台地からは縄文中期から後期の遺跡が発掘されており、人が住んだ歴史は長い。中世から近世にかけては風待港としての機能を有する村として発展し、廻船宿を営んだ家もあったようだ。この集落は民度が高かったようで、自分たちの集落を再認識するため、14年間にわたり約100枚の版画を作っている。この版画が集落の家の外壁に貼ってあった。集落の中心付近に津神島という小さな島があり、この島に津神社が置かれている。島の間には赤い小さな橋が架かる。そして集落と漁港、津神島を見渡せる仏崎の岬には「みかえり岬」と書かれた看板が立ち、ベンチが整備されていた。

途中の畑にリンゴの木があり、小さなリンゴが実をつけていた。

仏崎の西側が入桑の集落で、入桑漁港（第1種）が整備されている。続く集落が^{はにう}羽二生で、この沖合には小型定置網が置かれていた。その先が両尾で、道路脇に閉校になった西尾小学

校があり、114年の歴史に幕を下ろしたようだ。

椎泊、真木と集落が続くが、このあたりから道の両側に田が目立つようになり、やがて両津の市街地に入った。



「世界の灯台 100 選」の一つ・鉄製の姫埼灯台（左）、みかえり岬から大川の集落と津神島を望む（右）

能

佐渡の文化面での大きな特徴は能舞台がきわめて多いことだ。佐渡博物館の展示によると、全島に能舞台が 35 ヶ所あるとされる。地域的に最も多いのが真野の 9 で、これに両津（8）、羽茂（7）と続き、相川と小木にはない。

このうちのひとつで佐渡を代表するのが本間家の能舞台である。両津の市街地から県道 65 号を加茂湖沿いに進んだ湖尻付近に置かれている。

門を入り、まっすぐに進んだ先に御能見所という能を鑑賞する建物があり、その前に能舞台が置かれている。能舞台に連結して「宝生流佐渡能楽倶楽部」の看板がかかる事務所がある。中庭には「中曽根康弘観能記念の地」と書かれた木柱が建っていた。元中曽根総理が佐渡を訪れた時にここで鑑賞したのだろう。

本間家の末裔・秀信は 1641（寛永 18）年に奈良で能楽を修めて島に戻り、慶安年間には佐渡奉行所から能太夫を委嘱され、爾来今日まで佐渡における宝生流の中心となってきた。この能舞台は 1884（明治 18）年に再建されたもので、舞台建築には禅宗の影響を受けた唐様建築の扇垂木手法が用いられ、床下には音響効果を高めるため瀬戸焼の甕が 1 対埋められている。なおこの舞台は県の有形民俗文化財に指定されている。現在の当主は 18 代・本間英孝氏で、平成 11 年度の芸術祭で優秀賞を受賞している。

能の大成者である世阿弥は室町時代の 1434（永享 6）年に佐渡島に流刑になっている。このことが佐渡で能が盛んな理由と考えられがちだが、世阿弥が島民に能を教えたという記録はない。能が佐渡の人々に普及したのは江戸時代以降のことだった。

佐渡金山の奉行になった大久保長安は上述したような甲斐の国の出身で猿楽師の家に生まれた。長安は佐渡に赴任するにあたり、シテ方（能の主人公）や囃子方はやしを連れてきた。その後、神事能が定着し、幕府が瓦解しても島の能はすたれずに受け継がれてきたのである。

（公社）能楽協会に加盟するシテ方には観世流、宝生流、金剛流、金春流、喜多流の五流派であるが、江戸時代、佐渡で主流となったのは観世流と宝生流である。上述した通り本間家は宝生流で、その門下生が神社に奉納する神事能を請け負ったことから、島内に能が広ま

った。したがって佐渡における能のシテ方は、現在、全て宝生流になっている。

そして佐渡における能の特徴は、携わる人たちの多くはプロではなく、それぞれ仕事をしながら能の研鑽に努めている点にある。島民は自分たちの趣味と娯楽として能を愛してきた。しかし佐渡から若い人々の流出が続き、この伝統が新たな世代に受けつがれているかどうか甚だ危惧される事態となっている。



本間家能舞台の入口の門（左）、能舞台（右）

トキ

佐渡島は「朱鷺の島」と呼ばれ、トキは佐渡を象徴する鳥である。学名は *Nipponia nippon*、一属一種で日本を象徴する鳥でもあった。もともとトキは主として東日本に分布し、江戸時代まではそれほど珍しい鳥ではなかったようだ。息子が通っていた神奈川県立厚木高校にはトキの剥製があったから、神奈川県にも分布していたことになる。

トキは朱色の美しい羽根を持つので古くから大変珍重されていた。両津博物館の展示によると、伊勢神宮の式年遷宮の儀式にはトキの羽が御神宝の剣の装飾に用いられ、また矢羽、養蚕の掃立用箒、釣り用の毛鉤などにも用いられていた。トキの肉は「血の薬」「冷え症の薬」とされ、キジの4倍の値段がついたとされている。

こうした利用価値の高い鳥だったことからアホウドリと同じように大量捕獲され、絶滅寸前に至る。このため 1908（明治 41）年に保護鳥扱いになり、1934（昭和 9）年に天然記念物に、さらに 1952（昭和 27）年には特別天然記念物に指定されている。

戦後、トキは絶滅に近い状態になったが、その原因として、①化学肥料と農薬による餌の減少と中毒、②減反による餌場の減少、③テンやカラスなどの天敵の増加、④人間の行動による繁殖妨害、などが指摘されている。ちなみにテンは野ウサギ駆除のために昭和 34～38 年にかけて移入されたものである。

トキ絶滅の危機を前に、佐渡島の人々や新潟県、国などがトキの保護に乗り出すことになる。1975（昭和 50）年、環境庁はトキを保護するため、ヒナを捕らえて養育し卵を回収してふ化させることを試みたが、失敗した。その後、全鳥捕獲が計画され、1981（昭和 56）年に5羽を捕獲、トキ保護センターで飼育された。この5羽はミドリ、アカ、キイ、シロ、アオと名付けられたが、1995（平成 7）年4月に最後まで残ったミドリが死んだ。この5羽が捕獲される前に保護されていたキンも 2003（平成 15）年 10 月に死んでしまい、日本のトキは全滅した。人工ふ化による繁殖の試みは実を結ばなかったのである。

一方、中国でトキが発見され人工飼育にも成功していることが分かったことから中国種の移殖と人工ふ化が試みられることになる。こちらは比較的順調に推移し、トキを増やすことに成功する。2007（平成 19）年に野生復帰ステーションにトキを移し、翌年 20 羽のトキを野外に放鳥した。その後も人工ふ化と野生復帰ステーションでの馴化、放鳥が続けられ、トキテラスの展示コーナーによると、2022 年 12 月末時点のトキの推定個体数は 545 羽に増えている。その内訳は放鳥トキが 163 羽、野生下で生まれたトキが 382 羽である。

本間家の能舞台と佐渡乳業のチーズ工場を見てから、新穂地区のトキ関連施設を訪ねる。最初に向かったのが新穂湯上温泉の隣にあるトキ交流会館であった。下調べをしていなかったのので、てっきりトキに関する資料が展示されているものと思っていたのだが、実はこの会館はトキを野生復帰させる活動拠点で、メインは宿泊施設であった。

続いてトキ保護センター・野生復帰ステーションに向かう。途中、菩薩寺の前にそびえる「しだれ杉」という市の天然記念物をみる。樹齢 300 年以上の古木で、枝が垂れ下がるスギは初めてみた。

2008（平成 16）年 9 月の第 1 回トキ放鳥地の近くに、ちぎり絵作家・山下清の記念碑が置かれていた。山下清の母の実家があった場所である。この石碑の下に田んぼが広がっているが、突然 3 羽のトキが飛び立った。慌ててシャッターを押したが、写真中央に白い点が映っているのがおそらくトキだろう。

復帰ステーションは中国産のトキを野生に復帰させるための施設で生まれたトキはここで馴致している。施設の近くに行くことはできないので、別棟の建物から双眼鏡で馴致の状況を眺めることになる。現在 59 羽（♂：30 羽、♀26 羽、未確認 3 羽）が収容され、放鳥の日を待っていた。

さらにこの近くに放鳥し野生化したトキを観察するための展望施設、「トキのテラス」が整備されている。階段を上った 3 階部分が資料の展示室になっていて、トキの生態や復帰状況を学ぶことができる。屋上展望台で正面に大佐渡山脈とトキが生息する国仲平野が広がる。

続いて神宮寺を訪れた。この寺には 1295（永仁 3）年の銘をもつ銅鐘が残されていて、国の重要文化財に指定されている。鎌倉時代末期、国守北条宣時の武運を祈り、羽黒山正光寺に奉納されたものが、後に神宮寺に寄進されたものである。



トキが飛び立った山下清記念碑下の田んぼ（左）、トキのテラス（野生トキ観察・展望施設）

新穂銀山跡の周辺で、テンとイタチの研究をしている新潟大学修士課程の学生に遇った。

佐渡島には外来種のテンが増え、イタチの個体数が減っているそうで、その実態を研究するため、道路を歩いてテンとイタチの糞の確認調査をしているのだという。1日に20km歩くと言っていた。炎天下、若くなければできない仕事である。

日本の吹き溜まり

佐渡島には山も川も海もある。

山は1,000mを越え、森林資源は豊富だ。川には本州と同じようにアユ、ヤマメ、イワナが生息する。海では暖流系のブリ、寒流系のタラなどが獲れ、漁獲物はきわめて多様性に富んでいる。また島の周囲は磯で囲まれ、エゴノリ、イワノリ、モズク、ワカメ、アラメなどの豊富な海藻資源があり、サザエ、アワビ、ナマコなども多い。

米は島内消費を大幅に上回り、果樹は南方系のミカンから北方系のリンゴまできわめて多種類に及ぶ。牛も飼われ、ミルクや乳製品も自給できる。

気候は対馬暖流の影響を受けて暖かいし、冬季は大佐渡山脈に雪が降るが、背後は風が和らぎ、新潟港よりも静穏である。

島には能をはじめとする伝統文化が残り、歴史を感じさせる神社仏閣も多い。

つまり、佐渡は「日本の縮図」であり、「吹き溜まり」である。

郷土史家の渡辺さんは、「私には吹き溜まりのほうがぴったりくる」と言っていたが、日本の縮図ということは、佐渡は独立していける要素でもある。つまり経済的に自立できそうな島なのである。西丸震哉が「佐渡独立国」を提唱したのはこうした背景があったのだろう。

佐渡は日本で一番大きな島なので、滞在期間は1週間に及んだ。しかも内容が豊富なので覚書の枚数もすべての島の中で最も多くなってしまった。

両津港を14時35分に出発する佐渡汽船のジェットフォイルで新潟港に向かい、佐渡島を後にした。

【文献】

島津光夫・神蔵勝明（2011）：離島佐渡第2版，野島出版，三条市．pp.226.

司馬遼太郎（1987）：街道をゆく十，佐渡 国なかみち・小木街道．朝日新聞社．東京．143-331.

宮本常一（2009）：私の日本地図7 佐渡．未来社，東京．Pp.281.

岡本幸治（2010）：北一輝，ミネルヴァ日本評伝選．ミネルヴァ書房．pp.291.

宇佐美昇三（2013）：蟹工船興亡史，凱風社．東京．pp.293.

【追加調査】

10月3日から6日まで、3泊4日の工程で主として佐渡島出身の森知幾ちきに関する調査のために再訪した。10月3日の夕方に佐渡に入り、両津図書館で郷土史家の渡辺和弘さんに会い、知幾とそのお孫ちかしさんに当たる森幾ちかしさんに関する情報を得た。その後、佐和田の「旅館入海」に入り、3泊4日にわたり、同旅館を拠点に調査を実施した。

旅館入海

今回の調査は同級生の小田さんの勧めで、「旅館入海」を根城にした。この旅館の経営者

は大学の1年後輩の須田訓雄さんだが、彼は10年ほど前に脳梗塞を患っており、実質的な経営者は3男に代替わりしている。

旅館入海は国道350号沿いにあり、道路を挟んで真野湾に面する。須田さんのところは以前定置網も経営していたようだが、今はやめている。旅館以外にも後述する水産加工業を営み、料理屋もやっており、多角経営だ。現在は彼の息子たちが実質的に後を継いでいる。

この旅館の特徴は「モール温泉」と呼ばれる黒い湯の温泉が出ることだ。泥炭層と接触した水で、日本では珍しい。以前、千葉県養老溪谷で入った温泉も真っ黒だったが、黒い湯の温泉は2回目になる。この温泉は1970(昭和45)年に須田さんの父親が百数十mほどのところから掘り当てた。佐渡は火山島ではないのに温泉が至るところで湧き、しかもその種類が豊富な点に特徴がある。しかし熱源はないので、冷泉を加温している。浴室は畳敷きであった。畳敷きの浴場は初めての経験である。もちろん水に濡れてもいいように化学合成品が使われている。

2日目の夕方、須田さんは脳梗塞で足が不自由なのにもかかわらず、車で20分ほどかかる自宅から奥さんに付き添われて宿まで来てくれた。奥さんは学生時代によく朋鷹寮や大学祭にも来たことがあるとのことで当時の思い出に花が咲いた。お酒は医者に止められていないとのことで、地元の銘酒を4合ほど御馳走になった。良質なお酒で全く酔いがまわらなかったのは不思議である。

須田さんの家の屋号は「かすけ」という。佐和田バイパス沿いにかすけ商店の加工場がある。ここの名品は「フグの粕漬」だ。産卵で回遊してきたゴマフグの卵巣を2年以上塩漬けにしてフグ毒(テトロドトキシン)を無毒化し、地元の造り酒屋の「金鶴」のブランドで知られる加藤酒造店の酒粕に1年以上漬け、手間ひまかけた加工品である。石川県の金沢にはフグ卵巣の糠漬けはあるが、粕漬けは佐渡だけで、しかも「かすけ」でしかつくっていない逸品である。酒のつまみにご馳走になるとともに、お土産もいただいた。



旅館入海の外観(左)、かすけ商店の加工場兼直売所(右)

森知幾

10月4日の午前中、佐渡市立中央図書館で森知幾と北一輝について調査し、午後から知幾の孫にあたる森幾さん宅に向う。幾さんの電話番号を渡辺さんから教えていただいていたので、電話をかけると快く応じてくれた。

幾さんは知幾の3男である森三郎の子息にあたる。早稲田大学を卒業して、地元の高校で

教師をしていた。これまでに「森知幾 地方自治・分権への先駆」（1988 年）、「佐渡自治国 森知幾と明治の群像」（1994 年）など、知幾に関する多数の著書がある。1939 年生まれというから 84 歳になるが、いたって元気に見えた。

応接間に案内され、短時間であったが話を聞くことができ、書籍の一部を購入した。室内には知幾の写真と「相川伝習所」の卒業証書が掲げられていたが、水産伝習所のものはなかった。また佐渡出身の政治家で当選 11 回を誇り、農林大臣を 2 回務めた山本悌二郎（1870～1937 年、台湾精糖の社長も務める）が揮毫した「艱難玉汝」（困難や苦労を重ねることで人は成長する）の書が掲げられていた。もう一つは森三郎宛てに有田八郎が揮毫した「佛光普照」の書もあった。有田八郎は山本の弟にあたり、外交官や政治家を歴任した。三島由紀夫の小説「宴のあと」のモデルとなった人物である。三島はプライバシー侵害で訴えられたが、有田の死後、和解している。

森知幾は 1864（元治元）年に相川町の官船屋敷に、柏倉広吉・トリ夫妻の次男として生まれた。5 歳年長に兄・一徳がいる。5 歳の時に父を亡くし、母の生家である森家に養われ、1871（明治 4）年に森家の家督を継いだ。兄の柏倉一徳は東京高等師範学校（現筑波大学）を卒業後、教師となり、初任地が熊本県尋常中学校であった。ここで 4 歳下の徳富蘇峰と知り合っている。その後佐渡に戻り、県立佐渡中学の校長に就任、9 年間務めており、佐渡における教育界の重鎮であった。

知幾は私塾・学古塾で丸山溟北（1818～1892 年）から皇漢学を学ぶ。1879（明治 12）年 5 月に相川師範学科伝習所を卒業、その後、地元の小学校で助手を務めていたが、1884（明治 17）年、20 歳の時に上京して師範科予修学校に学び、さらに東京物理学校（現東京理科大学）に入学した。1886（明治 19）年に帰郷し、役場で働く。1889（明治 22）年に大日本水産会の水産伝習所が開所すると、25 歳の時に第 1 期生として入学する。知幾の青年時代の夢は法律家になることだったが、兄の一徳は水産伝習所に入学することを勧めたという。一徳は知幾の学資を出していたらしい。水産伝習所では内村鑑三の薫陶を受けている。翌年、伝習所を卒業し、明治法律学校（現明治大学）に学ぶが、1890（明治 23）年 10 月に脚気のため半年ほどで佐渡に戻った。



孫の森幾さん（左）、森知幾（右）

帰郷後、1890（明治 23）年に設立された佐渡水産試験場の助手になり、1892（明治 25）年には北溟雑誌の懸賞論文に当選している。論文の命題は「本州ニ於テ興スベキ事業ハ何ノ事業ヲ可トナス乎」であったが、知幾は水産振興の重要性を指摘している。

その後、この北溟雑誌の編集人を務めたが、雑誌廃刊後の 1897（明治 30）年、33 歳の時に佐渡で最初の佐渡新聞を創刊、翌年には被差別部落の子弟のために私立明治学校を創設、また 鰯^{ずるめ} 同業組合（後の佐渡水産組合）の組合長に就任し、死ぬまで現職だった。佐渡新聞を発行しながら、町会議員、相川町長、郡会議員などを務め、1914（大正 3）年に 49 歳で没した。

1895（明治 28）年に初代相川町長に当選すると、佐渡鉱山の払い下げ問題进行处理する。佐渡鉱山は明治維新後、宮内庁が管理していたが、1896（明治 29）年に岩崎弥太郎の三菱に払い下げられた。この時に宮内庁から相川町に交付金が支払われたが、町民からの「個人に配分すべし」との意見を退け、町に基金として残し、その後の町の発展に尽力している。知幾はまさに佐渡における自治、分権、反差別の先駆者であり、佐渡の水産業を発展させた人物でもあった。

ちなみに水産伝習所の第 3 回卒業生に房州出身の小谷仲治郎（1872～1943 年）という人物がいる。25 歳の時に渡米して、カルフォルニア州でアワビ缶詰会社を興し、成功した著名人である。知幾の 2 年後輩にあたる。房州に磯焼けが発生しアワビの生産が減少した折、佐渡に渡り、知幾の斡旋で鷺崎にアワビ製造所（乾鮑）を設けている。こうした縁から、房州より謀計網、流網、マグロ縄、サメ縄などの漁撈技術が佐渡島にもたらされた。

佐渡新聞と北一輝

森知幾は帰郷後、「北溟雑誌」の編集などに携わる。この雑誌は丸山溟北の弟子が総編集して発刊した雑誌で、島の有識者のほとんどが溟北の弟子を以って任じていたから島のほとんどの知識人が参加したというべきなのかもしれない。

1887（明治 20）年から 112 号まで丸 10 年間発行され続けた月刊誌であった。知幾は 71 号から 96 号まで編集人を務めている。しかし、次第に経営難に陥り、1896（明治 29）年で自然廃刊となった。ちなみにこの「北溟雑誌」は全号が山本修之助氏によって復刻され、現在、佐渡市立中央図書館に収蔵されている。佐渡人の知的水準の高さを示していよう。なおこの雑誌には知幾の恩師であり同志でもあった内村鑑三がしばしば投稿している。

この雑誌は文化交流サロンの性格で政治性を排除していたから、知幾の理想とする平民主義を説くことは全くなく不可能であった。廃刊の翌年、つまり 1897 年に知幾は佐渡で初めてとなる「佐渡新聞」を創刊する。創刊にあたって知幾は「佐渡は北海の孤島なりと 雖も亦帝州の要鎮なり・・・新聞雑誌なき土地は 恰^{また} 耳目なき人体に同じ」と書いた。じつはこの佐渡新聞は両津出身の北一輝を思想家に育てる重要な言論機関の役割を果たしたのであった。

北一輝（幼名：輝次、二十歳を過ぎて輝次郎に改名）は両津の湊で慶太郎・リクの長男として 1883（明治 16）年 4 月 3 日に出生した。森知幾よりも 19 歳下になる。北は昭和史を震撼させた青年将校による 2.26 事件の理論的指導者として逮捕され、軍法会議で死刑判決を受け、銃殺刑に処せられた人物である。一輝の弟は北吟吉で、戦争をはさんで衆議院議員を 8 期務めた政治家で、多摩美術大学の創立者としても知られている。

北一輝は、丸山眞男（1914～1996 年）などによって日本ファシズムの理論的指導者、国家主義者、右翼の理論的指導者とレッテルを貼られ、1970 年代に松本健一（1946～2014）

によって北の再評価がなされるまで、地元・佐渡ではタブー視されていた人物である。

しかし北の思想は、「天皇の国民」ではなく「国民の天皇」と天皇機関説を唱え、華族や貴族院制度の廃止、普通選挙の導入、言論の自由、農地解放、私有財産の制限、財閥の解体、労働者の権利保護などを主張する国家社会主義者であった。三島由紀夫は北の主張の多くは凶らずも戦後、占領軍によって実現されたと述べている。また弟の吟吉は「国体論及び純正社会主義」の序文で「この書は久しく神がくれの如く、天の岩戸に閉ぢ込められた。手力雄の命は米国であった。初刊当時から出ていたならば日本人は神話的迷信から早く脱却し、必敗の戦争などやらなかったと思ふ」と書いた。

北一輝は 1897（明治 30）年に創立 2 年目の佐渡中学に入学した。しかし眼病のために 1900（明治 33）年に佐渡中学を中退する。17 歳の時であった。しかし知幾は佐渡中学同窓会誌 5 号に掲載された文章を高く評価し、「清新澁刺ノ気滞チタリ、以青年ノ文ト為ス可シ」と評価する。そして 1903（明治 36）年には佐渡新聞に立て続けに投稿した。北一輝が佐渡新聞に投稿した記事で確認されたものは以下のとおりである。

大道の大義（東京硬石）（M34. 11. 21～29. 5 回）

中山氏の演説を聞く（両津町 K T 生）（M35. 09. 11）

善美なる妥協（北輝次郎）（M36. 02. 26～27. 2 回）

頑鉄生殿に（北輝次郎）（M36. 03. 04）

解難（北次郎）（M36. 03. 18）

水落生と林子（輝）（M36. 05. 06～07）（2 回）

林儀作君に与ふる公開状（北輝次郎）（M36. 06. 27～28）（2 回）

再び林儀作君に与ふ（北輝次郎）（M36. 07. 07）

狂堂兄に謝す（北卓堂）（M36. 07. 09）

斉藤八郎兵衛論（加茂一青年）（M. 06. 23）

国民対皇室の歴史的観察（所謂国体論の打破）（M36. ●。25～26）（2 回）

新派和歌談（武蔵坊弁慶）（M36. 07. 22～30）（8 回）

政界廓清策と普通選挙（卓堂）（M36. 08. 28～30）（3 回）

日本国の将来と日露開戦（卓堂）（M36. 07 月 04～05）（2 回）

日本国の将来と日露開戦（再び）（卓堂）（M09. 16～22）（6 回）

咄非開戦を云ふ者（卓堂）（M36. 10. 27～11. 08）（●回）

社会主義の啓蒙運動（卓堂）（M38. 10. 13～21）（●回）

北は 1906（明治 39）年 5 月 9 日にわずか 23 歳の時に「国体論及び純正社会主義」を自費出版しているが、この本は佐渡新聞に掲載した論考がベースになっている。しかし本書は時の政府によって 5 日後の 5 月 14 日に発禁処分を受けた。佐渡出身の北は幼いころから順徳天皇が佐渡に配流になり、すでに天皇は 12 世紀ごろから政治権力を失っていることを知っていた。「国民の天皇」という考えは「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と明治憲法が定める天皇による統治規定に反したのであった。

北一輝が 2・26 事件の計画を知ったのは 4～5 日前といわれており、事件の首魁でもないのに死刑になったのは、北の思想が軍部によって殺されたことを意味している。その後、日本は無謀な戦争に突き進み、敗戦を迎えた。

北は 1932（昭和 7 年）の「対外国策ニ関スル建白書」で、日米戦争は必ず「英米露支対日本ノ戦争」つまり世界全体を相手にする戦争になるから、これをしてはならない、と戒めている。その 3 年後には「日米合同対支財団ノ提議」という建白書で、その日米戦争は「支那ヲ問題」とする形で勃発する、と予言していた。そして、極東における日米戦争は必ずや第 2 次世界大戦を惹起する、それゆえにこれを日本から起こしてはならない、と警告もしていたのである。

大安寺

森知幾の墓は大安寺にある。大安寺は佐渡金銀山の開発を推進した佐渡奉行・大久保長安が 1606（慶長 11）年に創建した寺である。

佐渡地域振興局の駐車場に車を停めて、階段を昇りつめたところに大安寺があった。相川湾を望む見晴らしのよい場所である。

森知幾の墓は本堂のすぐ脇に森家の墓と並んで独立して建っている。墓の背後には、羽田村研究会が建てた案内板が置かれ、ここには次のようなことが書かれていた。

「明治 30 年、佐渡最初の日刊紙『佐渡新聞』を創刊、北一輝、青野季吉、土田杏村等の青年層にも影響を与えた。一方、幸徳秋水等とも交友する。明治 33 年、被差別部落の子弟のために『明治学校』を創設し、授産策をも講ずる。同年に結成した佐渡鰯組合（佐渡水産組合）は全国有数の組合であった。」

ちなみに近くには大久保長安の逆修塔も建つ。逆修塔とは自分の死後の冥福を祈るために自身で建てたものだ。長安は佐渡奉行として佐渡金銀山の基礎を築き、佐渡の発展に貢献したが、彼の死後、生前の不正蓄財が問われ、子どもたちは全員切腹していることはすでに述べた。したがって長安の墓はこの逆修塔だけである。



森家の墓と並ぶ森知幾の墓（左）、大久保長安の逆修塔（右）

無宿人の墓と上町

少し時間があつたので、前回見るができなかった無宿人の墓に向かった。無宿人は上述したように戸籍を有しない人で、佐渡鉱山の坑道内に溜まった水をかきだすための水替人足として、江戸、大阪、長崎などの都市部から集められた人たちである。過酷な労働環境にあつたから、ほぼ全員が佐渡で死に、しかも若かつた。

墓は佐渡金山の宗太夫坑の少し手前を山側に登った杉林の中にあつた。墓石には 28 人の

生国、戒名、名前、年齢が刻まれている。1853（嘉永6）年に建立されたものだ。佐渡金銀山に集められた無宿人は全部で1,800余人に及んだというから、墓があるのはほんのわずかということになる。江戸末期に建立されたものであるから、ようやく人権に目覚めたのかもしれない。妙法山覚性寺史蹟の看板が立っていたので、この寺の敷地内に置かれていたものであろう。

墓の近くは次助町といひ鉾山労働者が居住していた一帯らしい。また大工町通と書かれた看板もでていた。大工とは金を掘る人のことで、家を建てる大工はこのあたりでは「番匠」と呼んでいたという。

無宿人墓の登り口、つまり相川の街の一番山深い奥地に万照寺が置かれている。浄土真宗の寺で、上相川にあった専照寺とこの地にもとからあった万行寺が合併したと案内板に書かれていた。山門は奉行所の裏門を移築したらしい。この山門の前に坑夫・人夫供養墓が建っていた。鉾山で亡くなった坑夫・人夫はまとめて葬られたのだろうか。

相川の町は台地上の上町と海岸沿いの下町に分かれるが、この万照寺から佐渡奉行所跡に下る裏通りは「京町通り」と呼ばれ、古い街並みが残っている。この上町一帯は坂の街であり、現在は観光地となっているようで団体の観光客の一団が多くみられた。



28 人の名前が刻まれた無宿人の墓（左）、万照寺にある坑夫・人夫の供養墓（右）

下町ときらりうむ佐渡

上町は坂と階段の街であるが、下町は海に面し、比較的たいらである。天領通り商店街や羽田商店街が連なるが、やはりシャッター通りと化している。商店街の北のはずれに旧相川税務署の建物が残されている。1931（昭和6）年に建てられた洋館風の古い建物で、国登録の有形文化財である。ここから長坂と西坂の2つの階段が上町へと延びる。この付近には昔牢屋があったらしい。

商店街の一筋海側は現在広範囲に埋め立てられており、体育館、相川開発総合センター、テニスコート、ゲートボール場、多目的運動広場、佐渡市役所相川支所、消防署、浄化センター、佐渡保健所、相川学校給食センター、相川公園、佐渡地方振興局、佐渡相川合同庁舎などの公共施設がずらりと並んでいる。

その一つに「きらりうむ佐渡」（佐渡観光交流機構相川観光案内所）がある。この施設は佐渡金銀山についての情報発信をする目的で2019年4月にオープンした。建物は中庭を挟んで2棟に分かれており、1棟は事務所や講堂、インフォメーションセンターがあり、もう

1棟はシアターになっている。前はインフォメーションセンターでパンフレット類をもらっただけで、時間の関係からシアターには入らなかった。閉館の30分前であったが、料金300円を支払ってシアターに入る。しかし誰もいなかった。ここでは世界遺産登録を目指す佐渡金銀山、西三川砂金山、鶴子銀山などを映像で紹介している。4つのコーナーに分かれていて、1つのコーナーを見終わると係員が来て、次のコーナーに案内してくれて映像のスイッチを押すシステムになっているから、私一人のために係員の女性がつきっきりになった。

コーナーは、「奉行が見た『こがねの島』」、「山を掘り崩す砂金採り」、「江戸時代の相川金銀山」、「佐渡鉱山誕生」の4つのテーマで、当時の服装をまとった俳優が演じている。



現存する旧相川税務署の建物（左）、きらりうむ佐渡の外観（右）

清水寺

10月6日は朝9時の開館と同時に佐渡市立中央図書館に詰め、閉館時間の18時まで森知幾と北一輝の関連資料を調査する。

北一輝に関する資料は両津図書館にも多いと聞いていたので、翌7日は佐渡市立両津図書館に行き、同様に資料を調査した。同図書館は佐渡開発総合センターの最上階にあり、加茂湖が一望でき、素晴らしい眺望である。

昼食を「サン・ザ・バー」という飲み屋でハンバーグの定食を食べて、近くの北一輝の菩提寺である勝広寺を見る。勝広寺はもともと現在の両津小学校の場所にあったが、現在地に移転して墓地の敷地が狭くなり、上述したように北家の墓地は郊外の別の場所にある。この勝広寺は浄土宗の寺であるが、北一輝は佐渡に流罪になった日蓮がおこした日蓮宗の信者だった。

続いて寺から南東に5分ほど歩いて、北一輝の生家を訪ねた。ちなみに生家周辺の家は「北」という姓の表札が掛かった家が多い。生家は空き家になっているが、7～8年ほど前まで蒲鉾屋だったらしい。もちろん北家ではなく、別の人が購入して営業していたのだが、高齢のため廃業して本土の方に移住したようだ。現在、空き家になったこの家を北一輝を尊敬していた松沢顕治さんという方が購入し、近い将来、カフェや宿泊所などを備えた「北一輝記念館」として整備される計画だという。また「イッキ」という雑誌の出版計画もあるようだ。

この日は朝から時化でジェットフォイルは全便欠航になった。したがってフェリーで帰ることになったため時間ができた。

来るときのジェットフォイルのテレビで佐渡の観光案内のビデオが流れていたが、そのなかに清水寺が紹介されていた。規模は小さいものの京都の清水寺と同じように「清水の舞台」がある。前回来た時にはこの寺を訪れていなかったのので、レンタカーで出かけた。

仁王門の先に長く広い石段が続き、両側には杉の巨木が林立する。やがて中門をくぐると、広い前庭となり、中門の脇に鐘楼が置かれている。前庭の両側に石段が続き、その上部に本堂が置かれ、本堂の前に清水の舞台がつけられている。この寺には住職はいない。まさに古刹で静寂に包まれていた。舞台は修繕のため工事中であったが、だれもいないので構うことはないし舞台に登った。ただ床板の一部は腐っているところもあり、危険な状態だった。

この本堂は 1730（享保 15）年に建立されている。真言宗の寺で、奈良にある長谷寺の本堂を模しているという。門や本堂は佐渡市の文化財に指定されているが、建物の維持は大変だろう。

仁王門と道路を挟んだ反対の民家の敷地に「新穂大野の大イチョウ」と呼ばれる樹齢 1,000 年と推定される銀杏の木を眺める。この一帯は新穂銀山があった場所で、16 世紀中ごろに開発され、戦国末期から江戸初期にかけて「滝沢千軒」と呼ばれ、賑わったようだ。鉱山跡もたくさんあるようだが、こちらは「世界遺産」の候補にはなっていないため、ほぼ山の中に埋もれている。



北一輝の生家（左）、清水寺の本堂と舞台（右）

両津港に戻り、16 時のフェリーで佐渡島を後にした。ジェットフォイルが欠航のため、2 等客室の座敷はほぼ満員だった。ちなみに 2 等客室には椅子席はなかった。

【文献】

- 森幾（1988）：森知幾 地方自治・分権の先駆。（自費出版）p. 428.
- 森幾（1994）：佐渡自治国 森知幾と明治の群像。（自費出版）p. 478.
- 森幾（2023）：柏倉一徳 森知幾と北一輝 そして世界の未来（自費出版）p. 106.
- 相川町史編纂委員会（1995）：佐渡相川の歴史 通史編近・現代. 相川町. p938.
- 相川町史編纂委員会（2002）：佐渡相川郷土史事典, 相川町. P. 749.
- 松本健一（1972）：孤島コンミュン論. 現代評論社. p. 342.
- 松本健一（2014）：評伝北一輝 - I 若き北一輝-, 中公文庫, 中央公論新社. p. 289.
- 北一輝（2014）：日本改造法案大綱, 中公文庫, 中央公論新社. p. 175.